九州大学経済学部 同窓会報 第68号

九州大学経済学部同窓会
事務局　〒819－0395
福岡市西区元岡744
　九州大学経済学部内
TEL 092-802-5561 FAX 092-802-5560
mail：dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp
郵便振替　01750－6－21743

目　次

令和２年度行事予定（総会のご案内）／1
研究院長挨拶　経済学研究院長　岩田　健治／2
事務局長挨拶　同窓会事務局長　藤井　美男／3
支部だより
東京支部　事務局長　吉元　利行（昭和53年卒）／4
関西支部　理事　福本　翔悟（平成20年卒）／6
世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」と「倭の五王」について
副支部長　中野　光男（昭和50年卒）／7
福岡支部　福岡支部事務局／9
福岡支部交流ゴルフ会、第67回コンペを開催！
道永　幸典（昭和56年卒）／10
福岡支部　令和元年忘年会を開催
稲積　信雄（平成元年卒）／11
お知らせ　／11
同窓生健筆模様
著作集第四巻上（平成の大学改革と公立大学）
九州大学・北九州市立大学名誉教授　矢田　俊文／12
リレー随想
秀才は劣等生を友にする
園田　健夫（昭和29年卒）／15
「木下悦二先生の白寿のお祝い会」に寄せて
近藤　修平（昭和43年卒）／17
箱崎から唐津、呼子へ
靏川　洋（昭和45年卒）／19
国際経済論の大海を渡る人
ー木下悦二先生との出会いから今日までー
鳴瀬　成洋（昭和52年卒・昭和54年博士入）／21
人生は「ご縁」が大事
奥村　貴志（平成5年卒）／23
来日からの想い、「吃穿住行」篇
韓　鵬（平成29年卒）／25
人物往来　～退任
幸せな人生を目指して　岩﨑　勇／26
人との出会いに恵まれた38年間でした
大下　丈平（昭和53年卒・昭和55年博士入）／28
経済学研究院の先生方の近影／29
同窓会会則／30　**同窓会歴代会長**／32
同窓会からのお願い／32

令和２年度行事予定（総会のご案内）

令和２年度の各支部総会を下記の通り予定しております。皆様、お誘い合わせの上、多数ご参集下さいますようご案内申し上げます。コロナウイルスの影響で変更が余儀なくされることを懸念しております。

令和２年度　関西支部総会

コロナウイルス感染予防のため、「中止」と決定しました。
〈お問い合わせ先〉　関西支部事務局　谷村　信彦
公益財団法人　大阪観光局
TEL(06)6282－5908
E-mail　tanimura-n@octb.jp

令和２年度　全国・福岡支部合同総会

日時　令和２年６月15日（月）18時～
場所　ソラリア西鉄ホテル福岡
（福岡市中央区天神２－２－43 TEL(092)752－5555）
〈お問い合わせ先〉　福岡支部事務局　国生・高木
公益財団法人九州経済調査協会内 TEL(092)721－4900
E-mail　soumu-02@kerc.or.jp

令和２年度　東京支部総会

日時　令和２年７月７日（火）18時～
場所　学士会館　210号室
（東京都千代田区神田錦町３－28 TEL(03)3292－5936）
〈お問い合わせ先〉　東京支部事務局　吉元　利行
TEL（090）8877－9012
E-mail　t29yoshimoto@aol.com

関東地区新卒者歓迎会

日時　令和２年６月６日（土）15時～
場所　しごとのプロ出版社 会議室
（東京都港区高輪３－25－22 高輪カネオビル６階）

令和２年度　広島地区九大法・経同窓会総会

日時　令和２年11月開催予定
場所　未定

研究院長からの挨拶

経済学研究院長
岩田　健治氏

2019年４月に、２年間の任期で経済学研究院長（経済学府長・経済学部長）を拝命してから、早くも１年が経過致しました。振り返ると、たくさんのイベントが詰まっており、３年くらいが経過した錯覚を覚えます。不安の多い出発でしたが、大西副研究院長および４名の気鋭の部門長、そして有能な事務方の皆様に支えられ、また教授会メンバーの皆さんの協力のもとで、何とか中間地点まで漕ぎ着けることができました。

職務上、全国各地で活発に活動されている経済学部同窓会の皆様と交流する機会も格段に増えました。2019年５月18日（土）には大阪の同窓会に初めて参加し、関西で大変活発な交流がされていることを知りました。７月５日（金）には東京同窓会で「BrexitとEU経済」について特別講演をさせていただく機会を得ました。11月29日（金）には広島地区の法･経合同の同窓会に参加させていただき、若手から各界で活躍されるベテランまで、３世代に及ぶ活発な交流が行われていることを知り驚きました。地元福岡では６月18日（火）の同窓会はいつもながら盛況でしたし、また12月10日（火）の忘年会も初参加でしたが、その盛り上がり方には脱帽致しました。どの会においても、卒業生･修了生の皆様が、日本の各界でリーダーとして、あるいは将来を嘱望される若手として、様々に活躍されている様子をうかがい知ることができ、次世代を育成する教育現場に身を置く者として大いに勇気づけられた次第です。

その人材育成ですが、前回の「ご挨拶」で紹介させていただいた、教育プログラムの学際化とグローバル化は、お陰様で順調に進みました。

第１に、学部教育の学際化として、2018年４月に文系４学部（人文学部･教育学部･法学部･経済学部）が協力して立ち上げた「文系４学部副専攻プログラム」は、「歴史」「アジア」「情報」「ビジネス」の４つの学際的テーマを軸に提供される「横断型プログラム」と、文系他部局の専門領域を学ぶ13の「専門領域型プログラム」から成り、２年次から学部の枠を超えて履修することができるユニークなプログラムです。２期目となる2019年度は、４学部の２年次総人数の27％にあたる172名の学生が履修を開始し、第１期生とあわせて272名（横断型プログラム137名、専門領域型プログラム135名）が学部の枠を超えた勉学を行っております。このうち第１期生は2020年度には４年生となり、卒業時に授与される副専攻プログラム修了証書を目指すことになりますが、他学部のプログラムに登録したこれらの学生が、そのまま当該学部の大学院に進学することを容易にする「クロス入試」制度を2020年度中に導入すべく、磯谷前研究院長のイニシアティブのもと４学部が鋭意準備を行っているところです。

第２に、教育のグローバル化について、（１）学部では「経済学部グローバル・ディプロマプログラム（GProE）」が2019年４月からいよいよスタートしました。２年進級時の選抜（定員10名）を勝ち抜いた第１期生は８-９月のオーストラリア・クイーンズランド大学での短期語学留学を、同窓生・諸藤周平氏の篤志によって創設されたREAPRA基金の支援のもと無事終了し、2020年度以降の半年もしくは１年間の交換留学の準備に取り掛かっています。また第２期生も定員を大きく上回る応募があり、この４月からプログラムをスタートさせます。（２）大学院（学府）では、2017-18年度に拡充･新設した三つの英語プログラム――①公共経済学国際プログラム（IPPE）、②金融･企業経済学国際プログラム（IPFBE）、③経営･会計学国際プログラム（IPMA）――に世界各国から応募があり、2019年10月には修士課程５名、博士課程４名が新たに研究をスタートさせています。

かくして経済学部・学府のグローバル化は順風満帆と思いきや、2020年１月から世界に広がった新型コロナウイルス肺炎が深刻な影響を及ぼし始めております。経済学部・学府では120名（2019年５月現在）の留学生が学んでおり、その８割強が中国と韓国からの留学生です。春節などで国に帰ったまま現地で封鎖されたり、日本に再入国できなくなったりした学生・院生のために、単位取得や学位取得への特別対応を実施致しました。また感染エリアから日本に戻った留学生の皆さんには、健康管理や自宅で

の待機などを特別にお願いしているところです。一方、経済学部・学府学生の交換留学は例年10-15名程度（短期留学も含めると120名超）と活発ですが、感染エリアの大学では一時的閉鎖や新学期の開始延期などが相次ぎ、周到に準備した留学の一時的中断を余儀なくされる学生も出始めております。さらに３月に入ると日本国内での感染拡大により、同窓会主催の卒業祝賀会も中止に追い込まれ、卒業式や入学式にも深刻な影響が出ました。学生･院生･教職員の健康と生命を守り、教育への影響を最小限にとどめるために、教職員一同、智恵をしぼり、手を尽くしているところです。

新型コロナウイルスの拡大は世界経済にもリーマン級のショックをもたらしつつあります。各地で活躍される同窓生の皆さまも、仕事の現場や家庭で様々にご苦労をされているものと推察致します。しかし､九大経済の卒業生･修了生の強みとされる「行動力」と「独創性」が発揮されるのはまさに今かもしれません。皆で力を合わせることで、この難局を乗り切ることができればと祈念致す次第です。

令和２（2020）年度入学式　新入生327名
令和元（2019）年度卒業式　卒業生311名

同窓会事務局長
藤井　美男氏
1980（昭和55）年卒
1983（昭和58）博士入

３月23日（月）に、電気ビルみらいホールで開催を予定しておりました経済学部卒業生・経済学府修了生の卒業記念祝賀会は、新型コロナウイルス感染への懸念から、やむなく中止となりました。

経済学部卒業生は230名で、うち経済・経営学科149名、経済工学科81名でした。経済学府修士課程修了生は81名で、うち経済工学専攻13名、経済システム専攻27名、産業マネジメント専攻41名です。若手研究者への研究支援や学業優秀な学生への顕彰として贈られる「南信子」教育研究基金による「南信子」賞の授与が、以下の通り行われました。

修士論文・プロジェクト論文

（１）経済工学専攻	後藤　誠也
（２）経済システム専攻	野島　大輔
	鬼頭　みなみ
（３）産業マネジメント専攻	田中　章太郎
	門田　孝治

成績優秀者

（１）経済・経営学科	榊　和也
	高橋　和宏
（２）経済工学科	北村　海智

本年度も各支部の皆様方を始め大勢の方々の御協力を仰ぎ、一年間の活動と行事を終えることができました。関係の皆様方には心より御礼申し上げます。ただ、最後の行事である卒業記念祝賀会が中止となったのは大変残念なことでした。各支部におかれましては、新卒者を例年に増して厚く迎えていただきますよう、お願い申し上げます。新型肺炎が早く終息し、平穏な日常が戻ることを祈りたいと思います。

当同窓会は、財政問題を抱えつつ運営しております。その中で貫正義会長を先頭に、同窓会活動が充実したものとなるよう考えて参りますので、各支部同窓会役員の方々ならびに同窓生の皆様方へ、一層の御協力と御支援をお願い申し上げ、新年度の御挨拶といたします。

2020年３月経済学部棟

支部だより

東京支部

1．東京支部理事会

東京支部では、７月７日の同窓会総会に向け、３月９日午後７時から、九大有楽町オフィスにて、理事会を開催しました。コロナウイルスの感染拡大で、様々な自粛要請が出ていますが、熱のある人や心配な方に出席をご遠慮願い、秦支部長はじめ13名の理事が出席しました。

理事会では、昨年の反省を踏まえ、今年の総会の講演者・役員の選任・退任案、予算案について、検討を行いました。また、若手理事より、今年の新卒者歓迎会の開催日、企画内容について報告がありました。コロナ感染の収束の目途がつかないため、４月の開催を見送り、６月６日開催に変更しました。開催内容は、第一面に記載した通りです。

理事会記念写真　2020.3.9

2．九大経済OBOG現役懇親会

毎年12月前後に３泊４日で開催される鷲崎ゼミの東京合宿。これに合わせて、毎年恒例で開催される九大OBOG現役懇親会。鷲崎ゼミの卒業生だけでなく、他ゼミの先輩たちが、現役九大生と交流する場です。ゼミ生の皆さんは、11月29日（金）の初日は、東京証券取引所、日銀貨幣博物館、第一三共ミュージアムを見学、２日目の土曜日は、東京都水道歴史館、NHKスタジオパークを見学してから、19時に恵比寿のイタリアン・ダイニングチムチムに集合しました。懇親会の幹事は、鷲崎ゼミ７期の小田雅也

さん、森正明さん、中井萌さんで、経済学部東京支部、九大東京同窓会からも参加しました。

九大を卒業して、様々な業界・業種で活躍する先輩方と鷲崎ゼミの現役学生が２時間半（２次会含めると４時間半）みっちりと懇談できたようです。

出席した現役生は、Facebookで「社会人になる前のアドバイスを頂けたり、就活真っ只中の３年生は業界研究・企業研究に役立ちそうな情報をたくさん頂けたりと有意義な時間を過ごすことができました」、「改めて横のつながりだけでなく、縦のつながりも強いこのゼミに入って良かったなと思いました」と語っていました。

今年も、お待ちしています。

3．九大東京同窓会

①拡大理事会と新年のミニコンサート

九大東京同窓会では、毎年１月に理事会を開催していますが、桜井龍子会長（法学部卒。元最高裁判事）の提案で、今年から、お正月らしくミニコンサートを開催しようということになりました。今年は、九大フィルにお願いし、弦楽四重奏でした。

演奏は、「モーツァルトディヴェルティメントⅢ・全楽章」のほか、「サウンドオブミュージック　メドレー」などの映画音楽、日本のうたより「糸」（中島みゆき）「川の流れのように」（美空ひばり）、フィナーレは、真田丸（大河ドラマ・メインテーマ）な

切りに、富士海外旅行、ジャパンアメニティトラベル、東日観光で42年間勤務されています。旅行会社において、様々な企画を成功させ、世界に羽ばたいて活躍されました。その後も「旅の延長線上に…」ということで、これまでの経験を活かして毎年友人を率いて趣味のクラシック鑑賞をメインに世界各地の劇場を訪ねておられる、非常にアクティブな方です。女性の働き方が今よりもっと不自由だった時分に、悩みながらもご自身の考えで道を切り開き挑戦し続けてきた姿勢は、現代に働く私たちの世代にとって、仕事内容や性別を越えて勇気を頂ける素晴らしいものです。まさに社会で働く女性の先駆け的存在であり、最近執筆された著書『私の半生』を基に経験談をご講話いただきました。

今後は、３月19日（木）（延期）医師 認定NPO法人ロシナンテス代表　川原尚行さん（医学部卒）。５月21日（木）楽天ペイメント株式会社 代表取締役社長 中村晃一さん（経済学部卒）をゲストに開催予定です。

【東京支部事務局長　吉元　利行　昭和53年卒】

ど盛り沢山でした。最後は、マンドリンクラブ、コールアカデミーの有志も加わった、「賛歌」「松原に」で締め括りました。

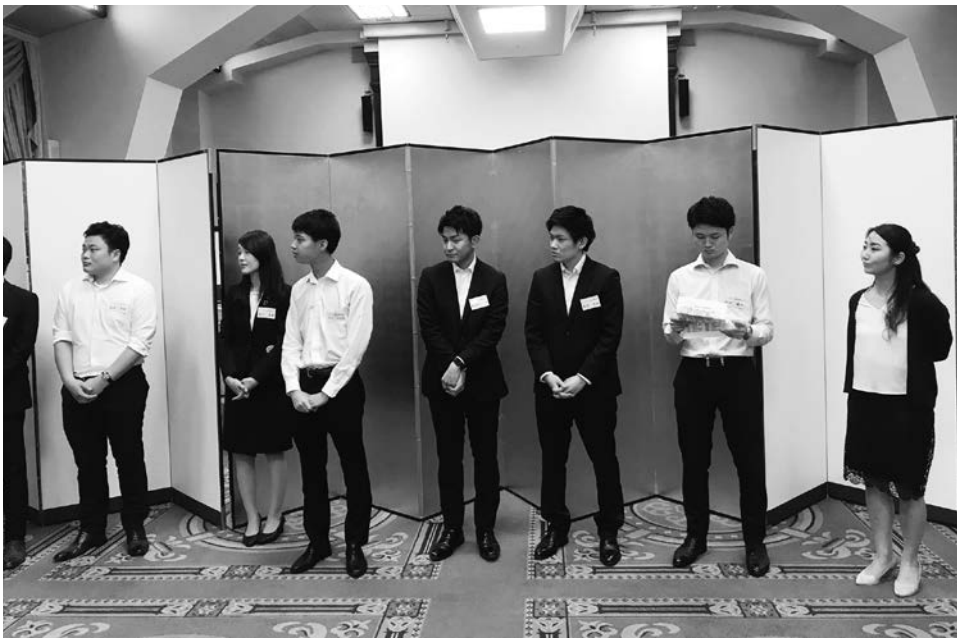
九大東京同窓会では、８月29日（土）17時からサマーフェスタをコートヤード・マリオット銀座東武ホテルで開催予定です。

②「学び舎」2020年第１回

学び舎とは、九大卒業生の若手メンバーによる企画で、経済学部卒業生が多数かかわって、企画している会です。「学び舎」は、以下の４つのメリットがある企画と位置付けられています。

- 普段は会えない"社会的実績があるOBOG"から話を聞くことができる
- OBOGの縦横の繋がりを作れる
- 自分の働き方、人生と向き合う時間が創れる
- 自分もできるかもという自信を得られる

2020年の第１回は、１月17日（金）ゲストに坂本 康子さん（東京同窓会副会長 / 藤の実会関東支部長）をお迎えして、有楽町九大東京オフィスで開催しました。坂本さんは、1962 九州大学文学部（仏文）卒で、近鉄航空サービス（現在の近畿日本ツーリスト）を皮



東京支部総会　新卒者紹介　2019.7.5

関西支部

秋の見学会（令和元年11月16日実施）報告

関西支部は、年に一度見学会を実施しております。元号が令和となった今回は、７月に世界遺産に登録されたばかりの百舌鳥・古市古墳群《古市エリア》を見学しました。午前10時に近鉄土師ノ里駅に20名が集合し、古墳めぐりがスタートしました。普段古墳を目にする機会が無い私たち初心者のために、旅行会社で約30年間勤務された経験を活かして、現在は古墳めぐりコースのコーディネートをされている川内野武さん（たまたま九州ご出身）にご案内をいただきました。

まず、土師ノ里駅の駅前、コンビニよりも駅の近くにある「鍋塚古墳」を登りました。墳頂（古墳の頂上）まで登ると、古墳が藤井寺市内の少し高台にあるため、景色を一望でき、当日は晴れて気温もちょうどよく墳頂は風も吹いていたため、とても気持ち良く感じました。墳頂では川内野さんから古墳についてレクチャーを受けました。古墳は天皇や地方の豪族、埋葬者不明のものも合わせて、全国で約30万基あり、宮内庁が管理する一部の天皇陵（天皇の墓）を除いて、基本的には各都道府県や市町村が文化財保護条例に基づいて指定、管理しているそうですが、中にはまったく管理もできていないものもあるそうです。この鍋塚古墳は雑草もきれいに刈り取られ、近くで見ても管理が行き届いている印象で、これだけきれいに管理するのは大変だろうと感じました。

続いて、大きさ日本第９位の仲姫命陵古墳（なかつひめのみことりょう）を参拝し、続く古室山（こむろやま）古墳、高速道路の高架下にある赤面山（せきめんやま）古墳、大鳥塚（おおとりづか）古墳をめぐり、誉田丸山（こんだまるやま）古墳、続く応神天皇陵古墳に到着した時には藤井寺市から羽曳野市に入っていました。応神天皇陵古墳は、堺市にある大仙陵古墳に次ぐ日本第２位の規模の古墳であり、第15代応神天皇の陵墓であるため、仲姫命陵古墳、誉田丸山古墳と同様に宮内庁が管理しています。参道と拝所が設けられており、世界遺産登録も相俟ってか、当日は参拝者でいっぱいでした。また、参拝したときは、ちょうど日光が拝所の方向から差していて非常に荘厳な雰囲気でした。

応神天皇陵古墳を後にして、二ツ塚古墳、東馬塚（ひがしうまづか）古墳、栗塚古墳、日本最古の八幡宮といわれる誉田八幡宮を見学して、懇親会会場の河内ワイン館に到着した頃には、参加者も少しくたびれた印象でした。河内ワイン館では館主の金銅社長にワイナ

河内ワイン館の前にて

応神天皇陵古墳の拝所にて

リーを案内いただきました。ワインの赤白でぶどうの品種に違いは無いこと（果肉のみを発酵したものが白、果肉を一度発酵させ皮と種を一緒に漬け込んだものが赤）、ワインを蒸留したものがブランデーになること等を伺ってとてもいい勉強になりました。さて見学の後は待ちに待った懇親会です。小森田支部長の挨拶に始まり、古墳を案内いただいた川内野さんも交えて、先ほどまでお預けされていたワインと河内ワイン館で製造している梅酒、お酒に合う食事を堪能しながら全員で歓談しました。

今回も皆さん、とりわけ幹事の凌さんのご尽力のお蔭で、楽しい一時を過ごすことが出来ました。

ありがとうございました。

【関西支部理事　福本　翔悟　平成20年卒】

◎今後の行事予定

- 関西支部総会：コロナ禍の現状から令和２年度の関西支部総会は「中止」と決定しました。次会の支部総会は令和３年５月を予定
- 関西支部見学会：令和２年11月14日（土）、京都亀岡・嵯峨野方面予定

2020年大河ドラマ「麒麟がくる」ゆかりの地を検討しております。

皆さまのご参加をお待ち申し上げております。

＜お問合せ先＞

関西支部事務局　谷村　信彦
公益財団法人　大阪観光局
TEL（06）6282-5908
E-mail　tanimura-n@octb.jp

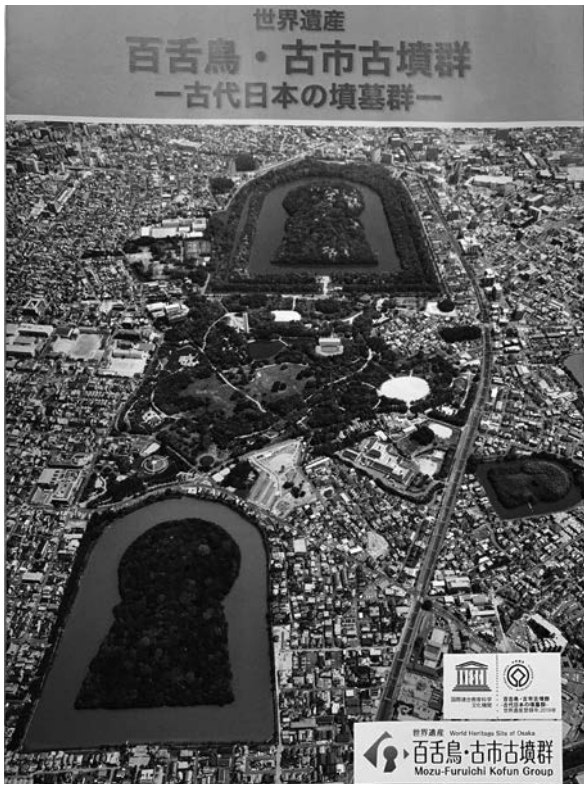
世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」と「倭の五王」について

関西支部副支部長
中野　光男氏
1975（昭和50）年

昨年2019年７月、「百舌鳥・古市古墳群」が世界遺産として登録された。大阪府で初めての世界文化遺産である。大阪府南部の堺市と羽曳野市・藤井寺市にまたがる二つの古墳群で、古代王権の形成期に当たる４世紀後半から６世紀前半の有力者の墓が密集している。その中で、堺市の百舌鳥古墳群＝仁徳天皇陵など23基と羽曳野市・藤井寺市の古市古墳群＝応神天皇陵など26基、合計49基が世界遺産として登録されたのである。

ちなみに、関西支部では2010年７月の見学会「堺まちあるき」で、当時世界文化遺産国内候補「暫定リスト」入りした仁徳天皇陵などを見て回ったことがある（同窓会報第49号参照）。そして、昨年11月の見学会「古市古墳群散策」で、正式に世界文化遺産に登録された古市古墳群を見て回ったことが、今回の同窓会報で報告されている。

2018年９月から始まった日本経済新聞の朝刊連載小説、池澤夏樹氏の「ワカタケル」を読んだが難解で苦労した記憶がある。しかし、第21代天皇雄略天皇を主人公とした、『古事記』や『日本書紀』をベースにした小説で、その終盤には陵墓の造営の話が出ていたと思う。この小説の連載中に「百舌鳥・古市



手前が履中天皇陵古墳、奥が仁徳天皇陵古墳（古市古墳群世界文化遺産登録推進連絡会議発行パンフレットより）

古墳群」が世界文化遺産に登録されたのであるが、ちょうどそういう時期に「倭の五王と古市・百舌鳥古墳群」と題する講演を聴いた。講師は伊藤友一氏で日本合成ゴム工業㈱（現JSR㈱）を退職した後に古代史の勉強をされた方で、『倭の五王は誰か』という本を東京図書出版から上梓している。

昨年７月９日付産経新聞夕刊記事には、「百舌鳥・古市に巨大古墳群が築かれた５世紀は、「倭の五王の世紀」ともいわれる。情勢が不安定な朝鮮半島諸国との関係が緊迫するなかで、ヤマト王権が中国南部の強国・宋に、後ろ盾を求めた。宋の歴史書『宋書』には「讃（さん）、珍（ちん）、済（せい）、興（こう）、武（ぶ）」を名乗る５人の王が、使節を派遣してきた」と記している。また、「最後の武が雄略天皇を指すことに異論はなく、興は安康天皇、済が允恭（いんぎょう）天皇であることもほぼ確実視されている。問題は讃と珍だが、讃は仁徳か履中、珍は反正（はんぜい）とする説が強い」とある。

前出の伊藤氏は『倭の五王は誰か』の中で、「倭の五王のうち、済－興－武は允恭天皇－安康天皇－雄略天皇でほぼ定説となっており、珍は仁徳天皇か反正天皇に比定されるが反正天皇でほぼ見解の一致を見ている。しかし、讃は応神天皇、仁徳天皇、履中天皇と大きく分かれているのが現状である」と述べている。ところが、2018年度古代歴史文化賞優秀作品賞を受賞した河内春人氏は、その著書『倭の五王』（中央公論社刊）の中で、「五王は記・紀のどの天皇に比定できるのか－讃は第15代応神天皇か第16代仁徳天皇、あるいは第17代履中天皇。珍は第18代反正天皇。済は第19代允恭天皇。興は第20代安康天皇。武は第21代雄略天皇とされる。讃以外はおおむね明らかにされているように見える。しかし、そこに大きな落とし穴がある」。「少なくとも讃と珍の兄弟について、記・紀系譜にうまく収めることはできないことは、これまでの研究で明らかである。そうであるならば済・興・武のみ正しいとすることについても留保が必要である」などと、問題点を指摘している。

一方、「倭の五王」と呼ばれる５人の王の陵墓はどこか、という話になるともっとややこしい。現在宮内庁によって治定（指定）されている天皇陵（陵墓）は、10世紀にできあがった史料「延喜式」に記された陵墓の管理台帳「諸陵及陵戸名籍」が根拠といわれるが、「明治時代以降の考古学の成果を反映したものではない」（武光誠『古墳解読』河出書房新社刊）。とはいうものの治定された陵墓は、仁徳天皇陵は大山（だいせん）古墳、履中天皇陵は石津ケ丘（いしづがおか）古墳（百舌鳥ミサンザイ古墳）、反正天皇陵は田出井山（たでいやま）古墳（以上、いずれも堺市）、允恭天皇陵は市野山（いちのやま）古墳（藤井寺市）、安康天皇陵は菅原伏見西陵（すがわらのふしみのにしのみささぎ）（奈良市）、そして雄略天皇陵は島泉丸山（しまいずみまるやま）・平塚古墳（藤井寺市）となっている。それに対して、天野末喜氏（藤井寺市教育委員会文化財保護課非常勤職員）は、「讃は仁徳天皇

右手前が応神天皇陵古墳、右奥が充恭天皇陵古墳（古市古墳群世界文化遺産登録推進連絡会議発行パンフレットより）

陵古墳、珍は土師ニサンザイ古墳（堺市）、済は允恭天皇陵古墳（市野山古墳）、興は白鳥陵古墳（羽曳野市）、武は仲哀天皇陵古墳（藤井寺市）を当てるのも一案」（古市古墳群世界文化遺産登録推進連絡会議発行『古市古墳群を歩く』第３版）と言う。讃を仁徳天皇、済を允恭天皇とみれば治定通りとなる一方で、珍（反正天皇か）と興（安康天皇）、武（雄略天皇）は治定とは異なる。つまり、学者・研究者によってさまざまな説・意見があるということである。

いずれにしても、武光誠氏が『古墳解読』の中で述べているように、「仁徳天皇陵古墳も仁徳天皇の陵墓ではない。仁徳天皇が亡くなったのは430年代初めだが、大山古墳は450年頃の古墳だとされている。そうであっても天皇陵とされた古墳が、江戸時代末から現在まで、特定の天皇の霊魂の祭祀の場とされてきたことを軽視すべきではない。仁徳天皇陵は、のちに仁徳天皇の霊魂を合祀した墓とみればよい」のである。もっとも武光誠氏自身は、①讃＝仁徳天皇→墓山古墳、②珍＝履中天皇→誉田（こんだ）御廟山古墳（以上、羽曳野市）、③済＝允恭天皇→上石津ミサンザイ古墳、④興＝安康天皇（？）→大山古墳、武＝雄略天皇→土師（はじ）ニサンザイ古墳（以上、堺市）と考えているようだが。

2020年２月、10年ぶりに仁徳天皇陵古墳とその近くにある堺市博物館を訪ね、担当者に古墳についてお話を伺ったが、やはり謎は深まるばかりだった。でも面白かったのは、「仁徳天皇陵古墳VRツアー」というのがあって、ドローンで上空300メートルから撮影した百舌鳥古墳群の雄大な姿や約1600年前の古墳築造当時の状況、古墳内部の石室を臨場感あふれる映像で体験できたことである。

以上、私の興味本位（参考文献で誤った理解があればご容赦ください）で書き連ねましたが、皆さんもぜひ世界遺産の百舌鳥古墳群および古市古墳群を見に来てください。

福 岡 支 部

１．九州大学アカデミックフェスティバル2019探訪記

2019年10月19日（土）10時から九州大学伊都キャンパス椎木講堂で開催。今年は高校生の参加も目立ち、参加者は過去最多の延べ1788人。久保総長の挨拶で始まり、続いて貫九州大学福岡同窓会会長（兼経済学部同窓会会長）が挨拶、山縣理事が司会をしながら、福岡同窓会の活動概要をパワーポイントで説明。その次に九州大学女性優秀研究者賞（伊藤早苗賞）の表彰式。

10時半からメインイベントのトークショー。『福岡はすごい』の著者の牧野洋氏や工学部と九州大学ビジネス・スクール（QBS）の同窓生として坂本剛氏など６人が登壇。今回は、ベンチャーや学生起業の関係者が多い。坂本氏はベンチャーキャピタリストとして経験豊富な話を披露。６月の総会で特別講演していただいた九大起業部顧問の熊野正樹先生も登壇。有機EL研究者として世界をリードする安達千波矢先生の話も魅力的だった。最後に牧野氏が米国西海岸と福岡の比較で全体をまとめられた。

ホームカミングデー交歓会は、２階ホワイエで開催。東京同窓会から櫻井龍子氏が来賓挨拶。和気藹々とした雰囲気で交流を深めました。

貫会長挨拶

午後は、高大連携で高校生の成果発表会があったり、九州大学ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター（QREC）の中間発表会があったり、

男女共同参画室の講演会、農学部の100周年事業等多彩な催し物が開催されました。

2020年は９月にアカデミックフェスティバルが開催されるそうです。伊都キャンパスを知る絶好の機会ですので、大勢の同窓生が足を運ばれるのをお待ちしています。

（文責：福岡支部事務局）

アカデミックフェスティバル会場

２．福岡支部交流ゴルフ会、第67回コンペを開催！
～11月10日（日）伊都ゴルフ倶楽部

西部ガス株式会社　代表取締役社長
道永　幸典氏　1981（昭和 56）年卒

令和元年11月10日（日）に伊都ゴルフ倶楽部において開催された「第67回福岡支部交流ゴルフ会」で優勝させていただきました、昭和56年卒の道永です。

当日は、天気に恵まれ、貫正義さん（昭和43年卒）、緒方寛治さん（平成４年卒）、田邊晴康さん（平成５年卒）と一緒に楽しくラウンドすることができました。改めてご同伴のメンバーの方々に感謝申し上げます。

ゴルフ会の参加者は60名で、過去３番目に多い参加者だったと伺っています。同窓会の交流ゴルフ会の歴史はかなり長いようですが、参加者が増え始めたのは５年程前からで、その頃と比べると、参加者は倍増しているようです。

また、この同窓会ゴルフの醍醐味は、年齢や職業を超えて、同窓生のつながりを楽しめることにあります。最年長の参加者は昭和41年卒の甲斐敏洋さんでしたが、平成20年代に卒業されたフレッシュな方も５名いらっしゃいました。昭和の卒業生24名に対

し、平成の卒業生が36名となり、時代も変わってきたなと感慨もひとしおです。九大ビジネススクール（QBS）の卒業生も３名加わり、同窓生の輪がさらに広がっているようにも思います。これからは令和卒の参加もあるのではと楽しみにしています。

表彰式では、恒例のスピーチで各同窓生が近況やゴルフの感想などを述べられ、和気あいあいとした雰囲気の中、同窓生の交流が深まりました。

最後になりましたが、幹事を務めていただいた九州電力の皆様に改めて御礼を申し上げます。

私は令和元年から九州大学経済学部同窓会福岡支部の副支部長をつとめることになりました。微力ながら、交流ゴルフ会や忘年会をはじめ、同窓会の活動に尽力していく所存ですので、今後とも同窓生の皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

３．福岡支部　令和元年忘年会を開催

(株)福岡銀行
稲積　信雄氏
1989(平成元)年卒

令和元年12月10日（火）、八仙閣本店で九州大学経済学部同窓会福岡支部の忘年会が開催されました。令和初のメモリアルな忘年会ということもあり、88名の同窓生が一堂に会し交流を深めました。

貫同窓会会長兼福岡支部長はじめ、岩田経済学研究院長、道永副支部長、高木副支部長、森監事、福岡の企業に勤めている中堅、若手の同窓生も多く参加していただきました。

貫会長がご挨拶され、経済学研究院の岩田院長の乾杯でスタートしました。八仙閣のおいしい中華料理をしばし堪能した後、まずは福岡支部の活動報告。続いてスポンサー各社賞・同窓会賞・八仙閣賞が当たる大抽選会。その後、じゃんけん大会、ビンゴゲームと楽しいイベントが目白押し。２時間があっという間に過ぎていきました。

弊社からも「九州産クエ鍋セット」を提供させて頂きました。九州に縁のある同窓生の皆様にとっては「アラ」としてお馴染みの幻（！？）の高級魚です。生産者の方が丹念に育てた自慢の一品ですので、次回の同窓会では当選者の方に召し上がったご感想を是非お聞きしたいと心に秘めているところです。僭越ながら、私も西日本鉄道様のギフト券に思いがけず当選することができましたので、家族とおいしい食事を頂く予定です。

盛大なイベントの後は、皆で森監事の美声に酔いしれ、最後に「松原に」を参加者全員で熱唱し、九大と同窓会のさらなる発展を祈って、道永副支部長に博多手一本で締めていただきました。

末筆ではございますが、忘年会の幹事役をつとめていただいた西部ガスの同窓生の皆様、数々の賞品を提供いただいた協賛各社のご協力に感謝申し上げます。

４．お知らせ

（１）令和２年度　全国・福岡支部合同総会のご案内

福岡支部では総会・特別講演会・懇親会を下記の通り開催いたします。万障お繰り合わせの上、奮ってご参加くださいますようご案内申し上げます。

日時　令和２年６月15日（月）
　　18：00～20：45
場所　ソラリア西鉄ホテル福岡　８Ｆ
　　（福岡市中央区天神２－２－43）
　　TEL（092）752－5555

（２）第68回交流ゴルフ会のご案内

福岡支部では、恒例の標記交流ゴルフ会を下記の通り開催します。ご友人等お誘いあわせのうえ、多数ご参加くださいますようご案内申し上げます。

日時　令和２年５月10日（日）
　　第１組７：57スタート
場所　伊都ゴルフ倶楽部　糸島市香力474
　　TEL（092）322－5031

※メール、郵送、同窓会のホームページなどでご案内していますが、本会報をみて参加を希望される方は、下記事務局までご一報ください。

＜上記お問い合わせ先＞
福岡支部事務局　高木、国生
公益財団法人　九州経済調査協会内
TEL（092）721－4900
E-mail soumu-02@kerc.or.jp

同窓生健筆模様

著作集第四巻上
（平成の大学改革と公立大学）

九州大学・北九州市立大学名誉教授
矢田　俊文氏

私は、2011年３月、40年間の大学教員生活に幕を閉じた。それは、数世紀に一度と言われる東北大震災と未曽有の原発事故の年でもあった。残りの人生をどう過ごすか私なりにいろいろ考え、人生の「終活」の一環として、40年の大学人としての研究・教育・大学運営活動の成果を「矢田俊文著作集」としてまとめることにした。

第一巻『石炭産業論』では、30歳（1971年）の時に執筆した博士論文を核に、その後わが国の石炭産業が輸入石油、海外炭との競争に押されて最終的に崩壊する過程を追い、2014年に刊行した。第二巻『地域構造論』は、30歳代に在籍した法政大学教員のときに、自ら提起した経済地理学の課題についての方法論に関する著書と論文を集めた上巻（理論編）を2015年２月に、41歳（1982年）で九州大学に転じてから精力的に執筆した実証分析の論文を整理した下巻（分析編）を2015年７月に相次いで出版した。さらに、1990年代にはいって国土審議会の国土政策形成に参画して以降執筆し続けた、わが国の全国総合開発計画について第三巻『国土政策論』とし、上巻（産業基盤整備編）で特定地域総合開発計画と全国総合開発計画に焦点を絞り、計画策定の時代背景、計画の実施過程、そして、半世紀を経た対象地域への効果と課題を幾つかの優れた経済地理学や社会学での実証分析書を参考に分析した。この本は、ほとんど書下ろしであったため、出版は、第二巻下の刊行から１年半後の2017年２月となった。

その後、執筆計画を変更し、第三巻下（国土構造構築編）をひとまず「棚上げ」にし、第四巻『公立大学論』を先行することにした。私は、大学人としての最終段階で、約15年間大学改革に深くかかわり、その経験を私の記憶が薄れないうちに、記録に残しておきたかったからである。私自身の大学改革労働がどういう意味を持ったか、社会科学的に確認したかった。著作集の一環として仕上げるため、わが国の大学史や高等教育政策の分野の専門書を「むさぼるようにして」読むことになった。単なる専門書ではなく、改革の現場をリードしてきた「実践的視点」を柱にする必要からである。上巻（平成の大学改革と公立大学）は、第三巻上刊行から２年半後の2019年10月に、下巻（平成の大学改革の現場実践録）は2020年３月刊行だから、ほぼ３年を要したことになる。

「著作集」執筆に心から応援してきた妻・和子が、第四巻上の刊行を病院のベッドで知り、読む体力もなく昨年11月に他界した。私の第四巻執筆への執念が、妻の病状の進行にどのような影響を与えたかは定かではない。慙愧（ざんき）に耐えない。第四巻の紹介という同窓会報の要請にこたえることにしたい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

周知のとおり、明治以来のわが国の大学制度は、1886年の帝国大学令に基いて東京大学が設置されたことを嚆矢とする。以後、明治・大正・昭和初期の第二次大戦終了までの間に、七つの帝国大学を頂点にして東京工業・東京商科・東京文理など官立６、公立１の実務系７大学、新潟・岡山・金沢・千葉・熊本など地方国立医科大学、そして早慶、明法、関々同立など首都圏と関西圏の私立大学群など国家中枢を担うエリート人材養成機構として、同心円状の階層構造が形成された。これを大学制度確立の第一期とする。

こうしたなかにあって、都道府県や市町村が独自に設置した「公立大学」は、府県立四医科大学と市立大阪商科大学の五大学が「登場」し、その過程で公立大学の「理念」が当時大阪市長であった関一氏によって定式化された。具体的には、①市民の精神文化の中心であること＝「市民の誇り」、②市民の軽からぬ負担で設置すること＝「自治体の財政負担」、③市民生活に緊要なる専門知識を授けること＝「教育の内容」、④市民の経済生活・精神生活に関係する学問を研究すること＝「大学の研究課題」以上の四点に集約されている。しかし、戦前では愛知、大阪、熊本の三つの医科大学が②の「軽からぬ財政負担」に耐えきれず、国立大学化し、終戦時には大阪商科と京都医科のわずか二つの大学だけが残った。

大学制度確立の第二期は、戦後のGHQのもとで準備が未熟なまま，急遽かつ妥協的に多数の「新制大学」が登場した時期であり、戦後日本の大学制度に重大な欠陥をもたらした。大きくは四つに集約さ

れる。

一つは、戦前の六年間の高等教育を「大学院」の検討を煮詰めないまま、四年制の大学に一元化し、そのなかで教養教育と専門教育を各二年ずつ併存させ、かつ教養科目内容を一律に導入したことである。第二は、戦前期の帝国大学や国立の実業や医科大学、一部の私立大学といった「エリート」段階の大学を、多様性を軽視して、一律に「大衆化」・「平等化」を図り、新制大学としたことである。旧制高等学校、師範学校、私立の専門学校も新制大学となり、これによって、教員や教育研究施設、カリキュラムなど教育内容の著しい大学間格差が温存され、多くの大学での教育内容の劣化をもたらし、「大学紛争」の一因ともなった。第三は、戦前の帝国大学などで慣習化した「学部教授会自治」方式が、多くの国公私立大学に「形式的」に普及し、柔軟かつ一体となった組織運営がほとんど確立せず、大学紛争のもう一つの要因ともなった。第四は、大学の内部組織が学部・学科、講座・学科目などによって構成され、人事の硬直性を軸に組織再編への強固な抵抗力として機能し、科学の発展や新しい人材養成への対応力の弱さをもたらした。

他方、地域づくりの専門人材の育成を目指して多くの公立新制大学が誕生したものの、やはり財政負担難で多くの医科・工科・農科専門の公立大学が国立大学の「学部」に移管された。しかし、その後地域づくり人材の育成の理念の普及と「地方交付税」を媒介とした国による一部財政支援がなされたこともあって、東京都や大阪府に加え、大阪、横浜、名古屋、北九州などの政令都市設置の総合大学、および北海道（札幌）、福島、京都、奈良、和歌山、九州（福岡）などの道・府・県立の医科・歯科大学が柱となり、1950年代から80年代までの約40年間、全国で35前後の公立大学が地域に確実に根を下ろした。1949年10月に公立大学協会が、国立大学協会、私立大学協会、私立大学連盟に先立って設置された。しかし、全国の都道府県に定着した国立大学、大都市圏中心に急増した私立大学に比較して、その「存在感」は量質ともに低かったことは否定できない。

いずれにしても多くの欠陥を抱え再出発した戦後の「新制大学」は、ベビーブームによる18歳人口の急増と所得向上に伴う進学率の上昇の相乗効果による進学者数の急増という大津波に襲われた。その受け皿の中心となった私立大学では、教育の質の劣化と施設整備費と教員増に伴う人件費の増大により「経営難」に見舞われ、相次ぎ授業料値上げの実施によって全国規模の大学紛争を惹起させた。他方、形式的な「学部教授会自治」による硬直した大学運営が、各地の国公立大学を中心に「紛争」を巻き起こした。こうした大学教育の混乱は、1960年代後半ないし70年代前半までの約四半世紀間続き、政府の介入と学生運動の暴力化によって大学紛争が終焉した。その後、政府は新制大学制度の欠陥の修復に本格的に乗り出し、1990年代に入って本格的に現実化した。明治・大正・昭和初期の大学制度の構築、戦後の新制大学制度の導入に次ぐ第三の制度変更、すなわち「平成の大学改革」である。

本書の上巻は、この平成の大学改革を分析するとともに、新しい設置形態である「公立大学」に焦点を当てて分析した。「平成の大学改革」は、いくつかの柱からなっている。

一つは、「大学設置基準の大綱化」によって教養教育を含む教育科目の自由な編成と大学評価制度の導入による教育の質の向上、二つには、国公立大学の法人化による大学運営の自己責任体制の確立、私学助成の強化による私学運営への政府の介入など、大学の管理運営の改善、三つめは、社会情勢や科学技術の発展に伴う、国際、先端技術、医療・福祉、地域づくりなど多様な高度人材需要に対応した制度改革、大学院の拡充、新大学の設置、公立大学の整備などを積極的に実施した。第四に、こうした多様な人材需要に柔軟に対応できるよう、学部・学科、研究科など教育研究組織制度の変革＝内部組織の柔構造化である。

「平成の大学改革」は、1990年代に全国の国公私立大学に怒涛のように襲い掛かった。大学の現場の教職員は、改革の実行を迫られて右往左往した。

第一の設置基準の大綱化では、東京大学教養学部、立教大学、国際教養大学などでは大胆な教養教育の改革によって大綱化の趣旨を生かす一方、大半の大学では「教養部の解体」による教養教育の空洞化をもたらした。また、設置レベルという入口管理に加え、教育課程の実施内容の評価を重視する制度の実行による教育の質の向上を図った。

第二の大学運営の改革では、理事長・学長一致型の画一的な国立大学の法人化、理事長と学長別置型選択可能な公立大学の法人化、さらに全教員参加型の学長・学部長選考の廃止や教員人事における教授会関与の相対化、さらに大学の意思決定機構を評議会方式から学外人材の参加による経営審議会と学内人中心の教育研究審議会の並立制への転換が法制化された。

第三の多様な大学の整備・拡充では、先端科学技術大学、科学技術大学、ロースクール、ビジネススクールなど多様な大学院の設置がなされた。さらに、21世紀の高齢化社会の到来を見通した政府の「ゴールドプラン」に基づき、医療・保健分野の公立大学が全国各地に設置された。また、自治体の高等教育への参入を通じて、公立の短大や女子大の四大化・共学化が推進され、公立大学が急増した。これによって、日本の大学制度のなかで永い間「軽視」されてきた公立大学が、戦前のごく少数から、戦後改革後の30余校をへて、1990年代、つまり「平成の御世」に一気に90校と設置形態別では最大の大学数に至り、わが国の大学制度と地域づくり人材の育成に欠くことのできない存在になった。

さらに、第四の大学内の教育研究組織については、学部や研究科などの学生の教育組織と担当する教員組織が不可分となっていたのを、教育組織と研究組織の分離、さらには教員組織の自立など、「柔構造化」を大胆に推進し、多くの大学で教育組織の再編が進んだ。九州大学は、学府・研究院制度という独自のシステムを導入して教育研究組織の柔構造化に先鞭をつけ、金沢大学、東京外国語大学、大阪府立大学など多数の国公私立大学での内部組織の再編が行われた。

筆者は、たまたま、この「平成の大学改革」期に、九州大学改革委員長（1994－2001年）、副学長（1996－2001年　大学改革・キャンパス統合移転担当）、経済学研究院長（2002－04年）、北九州市立大学学長（2005－11年）、公立大学協会会長（2009－11年）、大学基準協会評議員・理事・副会長（2008－11年）、大学評価･学位授与機構評議員、評価委員、評価専門員（2008－17年）として、大学という「現場」での改革に従事し、また、評価活動に関与するなど貴重な機会を得た。また、大阪新大学構想会議会長（2012－14年）として大阪市立大学と大阪府立大学の統合に道筋をつけ、その後外部委員として経営に参画した。

本書の上巻『平成の大学改革と公立大学』は、横糸に平成の大学改革について、国公私立大学を問わず優れた実践を多くの著作から紹介しつつ、縦糸にこの間の公立大学の急増とプレゼンスの向上に焦点を当てて分析したものである。なかでも、平成の大学改革において、伝統ある総合国立大学や大都市圏に集中する大規模私立大学と対比すると、平成の大学改革において「教育内容」という点では、先陣を切った大学が公立大学に多い。それは、大学の規模が小さいことが有利となり、「法人化」を契機に教員の意識の「ワンチーム」化が容易で、いくつかの優れた学長のリーダーシップが発揮されやすかったからである。

また、下巻『平成の大学改革の現場実践録』は、副学長として九州大学の学府・研究院制度の導入、伊都キャンパスの開発と統合移転に深くかかわる経緯とともに、初代の学長として法人化を活用した北九州市立大の改革の実態を記録した。加えて公立大学協会の会長として、強い関心を持ってきた高崎経済大学（高崎市立）、大分県立看護科学大学、国際教養大学（秋田県立）、県立広島大学等の公立大学および国立の宮崎大学地域資源創成学部、私立の九州産業大学地域共創学部等の「地域づくり人材の育成」等の動きをまとめた。全体として体験的な「平成の大学改革」の現場実践録である。読者の最も興味のある九州大学の改革および伊都キャンパス統合移転については、本同窓会報の次号で多少詳しく紹介する。

これらの大学は、教育組織と研究組織の分離、地域実践中心の学士教育、４年間の英語だけの国際教養教育、県内に分離していた多分野の公立大学の統合など大学改革の先陣を切った全国モデルとなったものである。

こうした大学改革について、学長、副学長など改革を主導した教員自ら著わした改革の現場実践録は必ずしも多くなく、自由な立場からのライターが資料を集め、関係者に取材した著書も意外に多くない。本書は、こうした著作にできるだけ触れることによって、平成の大学改革を「現場」の視点からまとめたものである。

リレー随想

秀才は劣等生を友にする

園田　健夫氏
1954（昭和29）年卒

九大経済学部同窓会報の編集者、福留久大名誉教授から「約30年前の、田中定さんや都留大治郎さんを偲ぶ会の写真集が出て来た。弟子十数人の中で、貴君は必ず出席している。書いてほしい」。見ると大半は大学の先生で、第一、私は「弟子」など呼ばれる資格はない。デキが悪かった。まず自己紹介、89歳。昭和29年卒、KBC九州朝日放送で報道、総務畑を歩み、最後は代表取締役専務。卒業成績は「良」が二～三散見するだけで、残りは「可」だった。書くことは引き受けたものの、学問については「なし」だ。

田中定（明36～平１）享年86歳、都留大治郎（大８～昭63）享年68歳。ふたりは経済学部史のレガシー、名物教授だった。田中さんは、私の在学中は米国へ研究留学で、講義も単位もとっていない。田中さんは、佐賀県の米穀生産を、自作農・小作農の現場で分析、フィールドワーク“佐賀段階”なる研究結果を報告、学会で高評だった。私は、定夫人の節子さんが番組協力者であり番組審議会委員でもあり親しかった。定さんが、勲二等瑞宝章を受章した時、節子さんの誘いで受章祝に訪れたことがある。ついでにマージャンもすることになり、徳本正彦九大教授、兼尾雅人九州経済調査協会理事（後に理事長）が加わった。勲章は、手にするとズシリと重かった。マージャンが始まる。田中家の牌は、中国製で一回り以上大きく、“ゲタ牌”と呼ぶ。途中で、兼尾さんが「先生、いま、牌をすり替えたでしょう。いかんですよ」と咎めた。「あゝ、そうか、ばれたか」と、田中先生、悪びれもせず、牌を戻した。牌のすり替えなど、決して許されないインチキだ。徳本さん「勲二等受章者がペテンか。奇々怪々千万」。節子さん「だから定は、家庭マージャンだけしか、しないのよ」。定先生は、平然としていた。

都留大治郎さん、田中定さんの一番弟子だが、専門の農業政策とは別に、当時、高度成長時代で、需要の強い都市開発や地域計画の学者でもあった。時代は、学者を政治が求めていた。福岡県知事に、九大の同僚が就いて、福岡市長選挙が近づくと、都留さんの名が上がった。当選有力の声高く、都留さんもその気じゅうぶんだった。都留さん常連の居酒屋「T」、入ると、都留さんが、弟子の兼尾さんと話し込んでいる。兼尾さんは私より４歳上だが、おかまいなしに、「先生、立候補されたら確実でしょうね」。ふたりは黙ったまゝで、あと、都留さんは帰宅された。兼尾さんは、不機嫌で「余計なことをいって」、私は怪訝な顔をすると、「いま、立候補をやめるよう説得していたところだ」、「なぜ」、「いわれんが、選挙はだめ」、「？？」。あとで聞くと、都留さんの内臓は、かなり弱っていたようだ。都留さんは、体調のことは知らぬまゝ、立候補を見送った。そして間もなく世を去った。もうひとつ、兼尾さんに忠告されたことがある。番組審議会で、私が、ある問題作を評して「センジンの功を･･･」とやってしまった。兼尾委員が、あとで「あれは“九仞の功を一簣にかく”だよ」、私は大赤面した。よく一緒に海釣りに行った。ボート釣りでキス、小ガレイ、船釣りでイサキや大ダイ、わが家に魚拓も残っている。

中楯興（大10生～平成20没）享年86歳。中楯さんと都留さんは、旧制佐賀高、九大で同級生、「オレ－オマエ」の仲だった。都留さんのような酒好きではなく、ビール一本くらいだが、宴会は大好きだった。中楯さんには蒐集癖があり、駅弁の紙から小芥子、とりわけ陶磁器に凝っていた。九州は焼物の宝庫である。有田、伊万里、唐津をはじめ薩摩焼、上

中楯興夫妻の大野城の新居を訪問した田中定夫妻　1973年９月

野焼等々・・・。中楯さんは、高級な茶器よりも庶民が日常使う陶器を好んだ。英彦山の裏側にある陶郷、小石原の雑器を愛していた。“中楯小石原守”、自他ともに許された称号だった。“中楯小石原守”から教わった器面の美がある。飛び鉋は小石原焼の特徴ある文様だ。技法は、鉋の刃先をろくろにかけ表面を削る。器面に跳びはねる文様が出る。小石原から隣県の小鹿田焼にも伝わった。民芸運動の旗手、柳宗悦、バーナード・リーチが小石原焼を「用の美の極致」と絶賛した。中楯さんは柳らのあとを継いで小石原焼の知名度を高めた人である。

徳本正彦先生

「あれが法学部で“全優”の徳本正彦だ」。学生時代の話だ。非凡の天稟といえる。長い付合いでいまも月二、三回酒を飲んでいる。50年余前、放送で選挙開票の解説を頼んだり、ラジオの連続番組「あすの西日本」の協力者になってもらった。協力者には兼尾さんも加わり三、四年続いた。企画、取材、とくに大臣や官僚のインタビューをしてもらった。KBCから出る謝金は貯金し、酒代や旅行に使った。都留さんが、兼尾、徳本、私が仲良くしているのを見て「“秀才は、劣等生を友にする”は鉄則だな」。徳本さんは、ふだん学生時代のことにふれないが「ところで、園田君、君の専攻はなにか」、私はギクッとしながら小声で「向坂さんの資本論・・・」、「ふうーん、天下の向坂逸郎が先生か」。恥ずかしかった。ここ10余年は九州学士会の読書会にお互い、毎月出席している。もともと名講義の人だが、政治学者の文学論もよい。川端康成や藤沢周平の小説の話は、唸らせるものだった。若い頃は、ハーバード大学に留学したが退職後も、世界一周二回、国際派学者だ。

白石馨さん、農学部卒後、福岡県企画主査から、後に北九州大学教授になった。徳本、私と同世代だ。旧制高農を出、博識、わが家の増築祝いに招いたことがある。床柱や障子、机などの講釈が尋常でなかった。「床の化粧柱は、本来、角柱であるべきだ。障子紙は機械織りだが、マニラ麻が望ましい。机、屋久杉の一枚板がよい。屋久杉は、これから調べれば、縄文杉より大きいものが発見されよう」。蘊蓄を傾けてくれた。大学では、同和教育などを講義していたらしい。

劣等生にも取り柄はある。私には芸がある。囲碁、ゴルフ、釣り、マージャン、カラオケ。サラリーマンの五種競技で、加えて酒がある。決して名手ではない。囲碁３段、ゴルフはH20だがホールインワン、79のベスト記録、釣りは90センチの大ダイを魚拓に、マージャンは自称“雀聖”で役満、国士無双の13面待ちを上がった。唄はディック・ミネ。誰とでも楽しく付き合える。秀才は劣等生を友にしてくれるのだ。

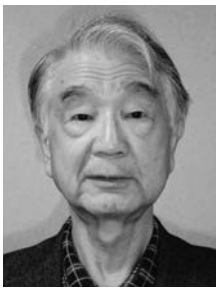
編集部註記：本稿冒頭に言及されている写真集は、中楯興先生が収録・整理されていたものを、長男・中楯潔氏（S50年卒）が寄贈下さったものです。

都留大治郎教授17回忌　於　K.K.R はかたホテル　04.3.27

（敬称省略）前列左より都留家長女・吉田菜摘、大屋祐雪、田中節子、中楯興、都留家長男・都留康、木下悦二、秀村選三、田中慎一郎、中山芳子。中列左より二人目から、園田健夫、原田三喜雄、原田溥、富澤義敬、梅木利巳、長野進、白石馨、松田昌二。後列左より二人目深川博史、四人目兼尾雅人、その右に深町郁弥、三上礼次、長谷川恒、鶴田善彦、山内良一の顔が見える

リレー随想

「木下悦二先生の白寿のお祝い会」に寄せて



近藤　修平氏
1968（昭和43）年卒

昨年の12月７日、ホテルニューオータニ博多に於いて木下先生の「白寿のお祝い会」が開催されたので報告する。

先生は、1920年12月10日生まれで昨年12月10日で99歳の白寿を迎えられた。先生の白寿のお祝いは、昨年６月18日経済学部同窓会福岡支部総会で持たれていたのだが、昭和54年木下ゼミ卒の瀧山琢治君や福田哲郎君のグループでも木下ゼミ卒オールで「白寿のお祝い」を行おうではないかと声があがり、43年卒の私に賛同を求めて来た。54年卒のグループが、最近先生との懇親会を開いていて、そこで話が出たのだった。43年卒の私たちに「白寿のお祝い会」の話が来たのには理由がある。43年卒の私たちは、毎年「木下ゼミ会」を開催しているからだ。

折角の機会を得たので「木下ゼミ会」の紹介をする。木下ゼミ43年卒は、「筑豊の子どもを守る会」の久賀克彦、バレー部の白石徹、社会人から入学した谷崎功、「社青同」の堤辰之輔、九大フィルの溝上勝、作家志望の山本信通、校友会誌「展望」の近藤の７人である。

私が、木下先生の「国際経済」のゼミを選択した理由は、日本は資源が無いので、これからは貿易立国だと考えたからだと思う。ゼミの指導方法は、小人数による教科学習で、筋湯九大寮等の合宿、卒論提出（当時の枚数は自由だった？）であった。教科内容は、当然「国際価値論」がベースである。経済学部はマルクス経済学が主流であり、基本は『資本論』であったが「価値」についてあまり理解できず、「国際価値論」は難しかった記憶がある。

木下悦二先生　卓話

ゼミの楽しみは、多様なゼミ仲間での駄弁リングや議論であった。なかにクリスチャンも居て優しい雰囲気もあり、私には居心地の良い居場所であった。

昭和43年卒年時頃には、学生運動が激しくなっており、エンタープライズ号寄港反対佐世保デモや六本松教養部のゲバ棒事件があった。入学時から、日韓基本条約締結反対、原潜寄港阻止、授業料値上反対、学館自治など、学生運動のテーマには困らなかったようだ。

時代背景には、ベトナム戦争、中ソ対立、社会主義経済の破綻、文化大革命等々の資本主義や社会主義の「矛盾」が露呈し、日本でも既存の政治組織や思想が権威を失い、経済では、エネルギー革命やコンピューター時代が到来し、高度経済成長時代から次の時代へと変わろうとした時期だったのではないかと考える。後日の話だが、仲間みんなは就職を控えていたのに佐世保にデモに行ったとのことである。先生が心配したのも当然である。

卒業時、作家志望の山本が敢えて留年を選び、ほかは全員就職した。その時の私は木下ゼミの巣箱から飛び立つ不安いっぱいの幼鳥の心理だったと記憶する。卒後も、先生と私たちとの「付き合い」は続いた。勤務地は、関東・関西・九州等と別れているので全員で集まることはなかったのだが、最初の頃は家族ぐるみで信州や佐渡ヶ島など各地での親睦であった。やがて遠くは、白石の勤務先インドネシア・ジャカルタを訪ね、彼のガイドでバリ島まで巡った。後年は、先生が下関市大の学長時代に覚えた釣りの

木下ゼミ会　2018年11月2月　津屋崎にて
左から白石、木下先生、溝上、藤原、近藤、谷崎

趣味のお蔭で、釣りと温泉を兼ねた旅先も多い。（久賀、白石も釣り好きなのである）。この親睦会は「木下ゼミ会」と命名し、各自の問題意識等を発表議論することにしている。途中、新聞記者の藤原忠彦も加わり、少し真面目な議論もする楽しい飲み会の卒後ゼミである。当然、先生からは学会発表論文の話もある。（先生は、平成28年末に奥様を亡くされるまで論文を書かれていた）。

何故、卒後ゼミ懇親会が始まり続いたのか、先生を中心とする気の合う仲間だったからだけではないと考える。私流の解釈は、社会経済そしてイデオロギーが大きく変動するなか、大企業等への就職による安定した生活を求めるだけでは、自己の居場所・立ち位置が不明確で、仲間の生き方を見たい、共に歩きたいという気持ちがあり、先生も教え子の社会での行方を見届けたいとする興味があったからだと勝手に考える。「木下ゼミ会」は、昨年11月津屋崎の麻生保養所一泊で開催した。卒後51年、半世紀を超えている。その間、山本信通が50歳で早逝し、一昨年には堤辰之輔が亡くなった。「木下ゼミ会」も寂しくなって、皆の酒量も落ちてきたが、先生は元気でビールと焼酎を美味しそうに飲まれている。翌月は先生99歳の白寿を迎える歳である。「白寿のお祝い会」は単に先生の長寿を祝うだけでなく、半世紀共に生きて来た私たちの記念日でもあるのだ。

ここで、「白寿のお祝い会」に話を戻そう。当会の準備は、東京在住の54年卒の瀧山琢治、福田哲郎、田代清和、中楯淳の諸君により始められた。会開催の幹事代表を伊東信一郎君（ＡＮＡ ホールディングス会長）にお願いし、木下先生との連絡係として私が就いた。会参加案内状の送付先の名簿は昭和57年卒高木直人君（九州経済調査会理事長）が作成したものや先生宛の賀状等で作成された。又、下関市大の木下ゼミの卒業生にも呼び掛けることになった。これは下関市大のゼミ62年卒尾崎眞由美君の活躍による。先生のご友人にも声かけをした。お蔭で、当日は「嵐」のコンサートが開催され宿泊の確保等難しい日にも拘わらず、参加者は、遠方から、又、41年卒中尾秀光さんから下関市大62年卒松尾勇篤ほか12名の皆さんまで年齢幅が広い、71名参加の盛会となった。

会の幹事は、内容として、単なる長寿のお祝い会ではなく、①先生の元気な姿を見てもらい、参加者がそのエネルギーを受け取ること、②学生時代の思い出に花を咲かせる楽しいひと時にすること、で進めることにした。そこで、先生に講演をお願いすると、『米中と「ツキディスの罠」』を話された。グレアム・アリソンの「ツキディスの罠」論（テキスト『米中戦争前夜』ダイヤモンド社）です。99歳の白寿を迎えても、国際社会に関心を持ち続け、発表す

白寿会実行委員のみなさん

上段左より　近藤（43年卒）（筆者）、尾崎（旧）氏（62年卒）、福田氏（54年卒）、平井氏（54年卒）、瀧山氏（54年卒）、中楯氏（54年卒）
下段左より　羽根（旧）氏（59年卒）、木下先生、井出（旧）氏（52年卒）

る知力には、みんな感心した次第だ。歓談の時間になると、卒年次別の思い出発表や下関市大ゼミ卒によるハンドベルの演奏など、瀧山君のユーモア溢れる司会進行で進められた。石田修教授は木下先生の経済学部改革への貢献を話された。盛り沢山の内容で、あっという間の楽しい「お祝い会」であった。

お開きでは、参加者に卒業論文が還され、喜びのサプライズとなった次第でした。

私にとって、先生の嬉しそうな笑顔や楽しく盛り上がった会を、後輩の幹事の皆さんと共に出来たことは望外の喜びでした。先生の益々のご長寿を祈念申し上げます。

リレー随想

箱崎から唐津、呼子へ

霜川　　洋氏
1970（昭和45）年卒

最近は毎年開催される大学の新聞部の同窓会に出席することが楽しみになってきました。1日目は山歩きをしていましたが、平均年齢が80歳近くになるとあまり険しい山や長時間は無理なので、1～2時間程度の野歩きと翌日は史跡散歩などをしています。

1　箱崎界隈

前日の夕方、わたしは東区役所隣のホテルにチェックインした後、大学キャンパスが伊都地区に移転したため解体中の箱崎地区の旧文系と工学部跡を見学しようと出かけましたが、箱崎松原、網屋立筋の狭い路地を40数年ぶりに歩くと道に迷いながら、ようやく、旧九大正門前にたどり着きました。正門前の交番跡も更地になっており、解体工事のための柵に囲われて、大学の面影は唯一農学部に続く東側のレンガ塀が残っているだけでした。箱崎の街並みは平日の5時過ぎなのに、人影は疎らで、かつての大学門前町の面影はありませんでした。

夜は筥崎宮参道前の屋台「花山」が未だ健在で、遅くまで懇談をしました。

2　篠栗九大の森散策

翌日は農学部演習林でもある「篠栗九大の森」散策。九大の森は面積約17ヘクタールでモミジ、パフウ、ハンノキなど約50種の常緑広葉樹と40種の落葉広葉樹が茂り、園内の蒲田池は周囲2キロの遊歩道があり、九大在学中は知りませんでしたが、糟屋郡の篠栗町や東区の人々の憩いの場になっていました。アクセスは少し不便ですが、園内に入るとカシワ、ナラ、クリなどの森が広がり、福岡都市圏にこんな静寂な空間があるのかと秋の自然を満喫しました。ただ、蒲田池の水辺の森はラクウショウ（沼杉）があり普段はとても幻想的、神秘的との評判で楽しみにしていましたが、昨年（2019年）は雨が少なく、池の水位が低く、少し残念でした。園路の途中に樹齢200年以上、幹直径50センチ、樹高20メートル以上のヤマザクラの大木を初めて見ました。ソメイヨシノの里桜を見慣れた私にとって本居宣長や小林秀雄が愛したヤマザクラのイメージがあまりなかったのですが、雑木林の中に立つヤマザクラの大木は野武士の趣を感じさせました。

夜は博多駅から福岡市地下鉄と直結しているJR九州の筑肥線で東唐津のホテルで総会兼懇親会を開催しました。

3　唐津市内見学

最終日は午前中にまず、旧唐津銀行本店を見学しました。それは明治45年（1912年）竣工で唐津出身の辰野金吾の監督のもと弟子の田中実による設計でビクトリア様式の赤煉瓦に白い御影石を混ぜ、屋根上に小塔やドームを載せ、店内のカウンター、らせん階段、アーチ型の窓、暖炉などが近代日本建築を偲ばせるものでした。

次に杵島炭鉱などの炭鉱主である高取伊好の邸宅であった重要文化財の旧高取邸に向かいました。敷

地は2,300坪あり、和風を基調としながら洋風のランプシェードなどアールヌーボー調の洋間もあり、さらに、大広間には民家として現存するのは稀な能舞台も設けられ、杉戸絵や欄間の意匠など、見どころ満載でした。

福岡県や長崎県の炭鉱は幕末明治から有名でしたが、唐津の炭鉱も18世紀に発見され、唐津藩の専売制のもと幕末・維新期では蒸気船の燃料として全国の石炭出炭量の３分の１までになっていたそうです。近代和風建築の粋を極める唐津の旧高取邸は黎明の石炭産業の栄華が偲ばれるものです。

４　肥前名護屋城

呼子の名護屋城は秀吉の文禄・慶長の役（1592～98年）の国内拠点として、５カ月の短期間で築造されたもので、今日では国の特別史跡に指定されています。当時は全国から動員された大名の陣屋が130以上、人口は20万人以上を超えた城下町が出現していたようです。大手口から坂を10分ぐらい登ると本丸（天守台）跡に至り、玄界灘の眺望が広がり、晴れた日は壱岐、対馬が望見されるそうです。本丸跡には東郷平八郎揮毫の「名護屋城祉」の碑と戦前の俳人の青木月斗の「太閤が睨みし海の霞かな」の句碑がありました。

戦後生まれの私にとって朝鮮半島や中国大陸は海のかなたのような気がしますが、19世紀の維新後の人々にとって、玄海灘を眼下にした時、島伝いに唐、天竺も近いような壮大な気分になったのでしょうか。

秀吉の朝鮮出兵は今日から考えると国際情勢を知らない、無知、傲慢な政策と思えますが、秀吉は中央集権的封建社会の形成のため、中世の荘園経済からの脱却を図り、検地、石高制や商業の活性化などにより流通都市と城下町の建設を目指しました。また、織豊時代は15・16世紀の西洋の大航海時代、ポルトガルやイスパニアのアジア進出は日本にも押し寄せており、国際情勢も十分に宣教師から伝わっていました。また、対馬の宗氏を通じて太平の世が続く朝鮮王朝の国内事情を知り、日明貿易の形骸化、東アジア世界の頂点であった明の弱体化を感じていたから、国内戦の延長のような気分で海外出兵したのでしょうか。

また、松浦半島は対馬、壱岐、博多湾と同じように13世紀の元寇の来襲地でもあり、多くの被害、犠牲を出しましたが、地元の松浦党の武士団も２回目の弘安の役（1281年）の時は沖に停泊する蒙古の軍船に夜襲をかけたりして軍功を立てましたが、戦後の鎌倉幕府からの恩賞は正規の御家人たちだけに与えられため、松浦党はその後、さらに団結を強め、海賊行為や倭寇として朝鮮半島や明の海岸線を襲った、と白石一郎は『元寇襲来』で書いています。

帰りに佐賀県立名護屋城博物館に立ち寄りましたが、16世紀の名護屋城関係だけでなく古代から近現代（徳川時代の朝鮮通信使など）までの日本列島と朝鮮半島との交流の歴史をバランス良く展示、紹介していました。

今回の同窓会の収穫は九大新聞が休刊して久し

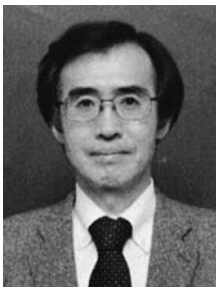
旧高取邸前で

く、部員OBの新会員の加入も数年なかったところに、昭和59年卒業の伊万里市在住のM君が参加してくれたことです。M君は理学部を卒業後、歯学部に再入学し、新聞部に入部して読者開拓や既刊新聞のマイクロフイルム化など積極的に活動されたとのことです。

今後の同窓会の活性化にも寄与してくれるのではないかと期待しているところです。

リレー随想

国際経済論の大海を渡る人
―木下悦二先生との出会いから今日まで―



神奈川大学経済学部教授
鳴瀬　成洋氏
1977(昭和52)年卒
1979(昭和54)年博士入

木下悦二先生は国際経済論の大海を一人で渡ってこられた。学問的自伝『我が航跡』はその航海日誌である。その豊富な内容を見ると、先生の航海がいかに遠大なものであったかが分かる。以下に記すことは、先生の航海の後半を目撃した者によるそのささやかな観察録である。

大学に入学して間もない1973年４月初め、新入生を対象にした履修指導（これを行ってくださったのは福留先生）が終わった後、専門課程の一人の先生が「経済学部と学生生活」というテーマで講演するために登壇された。これが私の木下先生との出会いである。

「経済学部で勉強したからといって役に立つ実用的知識が身につくわけではない。その意味で経済学部は損な学部だ」。こんな意外な言葉で講演は始まった。では一体、大学で何を勉強したらいいんだ、と思いながら聞いていると、「もともと自分は理系志望であったが、父親が商人であったこともあって理財科（経済学部）に進学した。そういう訳だから初めのうちは経済学に興味をもてなかったが、マルクスに出会って、これを勉強したいと思った」と続き、講演は次のように結ばれた。「大学で勉強すべき一つのことは古典を読むことである。古典を読むとは巨人の肩の上に立って世界を見ることであり、視野が広がり認識が深まる。古典を読め」。初めのうちは訝しく思いながら講演を聞いていたが、終わるころにはすっかり納得していた。先生の話が説得力をもつ理由を理解できたと思ったのは、専門課程に進学し「世界経済論」を受講したときである。それは、誰もが理解できる平易な言葉で物事の本質を言い当てるのが木下先生の真骨頂であり、それが新入生向けの講演にも表れていたということである。

大学に入学して初めて聞いた講演が機縁となって木下先生のゼミナールを選んだ。20人の仲間と学んだゼミナールの２年間は本当に有意義であった。それにはいくつかの理由がある。第一は、名幹事、鳥越憲行さんがゼミナールを仕切ってくれたことである。特に、鳥越さんが企画してくれた萩、豊後高田、平戸でのゼミ合宿は楽しいものであった。300ページ近い本を２泊３日で読み上げるハードな勉強、名所めぐり、夜遅くまで騒いだコンパなど、どれもがかけがえのない思い出である。「52年度卒は鳥越や～」というのが、今でも我々52年度卒組の合言葉になっている。

第二は、ミュルダール『経済理論と低開発地域』、バラン『成長の経済学』、バラン＆スウィージー『独占資本』、ガルブレイス『新しい産業国家』など、今でも名著として通用する本を読んだことである。ミュルダールの本は特に印象に残っている。最初に読んだときは、ミュルダールが先進国と途上国の不平等な関係を表わすために提示した「累積的因果関係」という概念を覚えて、この本を理解したつもりでいた。しかし、もっと深いこと、つまり、先進国と途上国の間の不平等を説明し得ない近代経済理論を、その哲学的基礎である功利主義にまで遡って批判していることは全く読めていなかった。この問題の重要性に気付き、学生時代のおぼろげな記憶からミュルダールの著書にたどり着き、それをもう一度勉強し直したのは卒業後20年以上も経ってのことである。

第三は、サブゼミを組織して、木下先生の主著『資本主義と外国貿易』やヒルファディング『金融資本論』などを読み、より深く勉強できたことである。このときチューターを務めてくださったのが、当時助手あるいは大学院生であった西田勝喜さんと菰田文男さんである。『資本主義と外国貿易』の主要テーマはマルクスの理論を基礎に置いて世界経済を理論化することで、それは国際価値論といわれる領域である。先生は講義でも正規のゼミナールでも国際価値論に言及されたことはない。それだけに、マルクス派国際経済学にこのような理論的研究があること

に驚き感動した。もともと理論的なことに関心があった私の研究はこれに向かい、国際価値論とその淵源であるリカードウ、マルクスが私の研究のバックボーンを形成することになった。

1977年、学部を卒業して大学院に進学した。大学院生として木下先生のもとで学ぶ中で強く感じたことがある。先生は実によく古典を読んでおられる。その知識を総動員して緻密に理論を組み立てられる。しかし、理論によって現実を裁断されることは決してない。現実を分析する際はそこに貫く論理を摘出される。だから、現実が変わればそれを説明する原理も異なることになる。透徹した理論と強固な現実主義の両方をもっておられるのが木下先生だと言えよう。

先生が二冊目の理論書である『国際経済の理論』を刊行されたとき、本山美彦先生（京都大、当時）はそれに「高みに達した人の作品」と最上級の賛辞を贈られた。先生が九大を退官されるときの記念パーティーでは、奥村茂次先生（大阪市大、同）は「ひとりの人でこれほど広範な研究領域をカバーできるものか」と述べられ、驚嘆の念を隠そうとされなかった。こうした木下先生の名声は今も健在である。それを示すエピソードを紹介しよう。

2017年は国際経済を研究する者にとって記念すべき年であった。リカードウが国際貿易の基礎理論である比較生産費説を提示した主著『経済学および課税の原理』（初版）が刊行されて200年に当たる年だったからである。それを記念して多くの書物が出版され、シンポジウムが催された。その一つに、日米欧のリカードウ研究者が集い日本の三人の研究者によって編まれた*Ricardo and International Trade*がある。本書では、編者の一人である田淵太一さん（同志社大）と私が執筆した二つの章で木下先生のリカードウ解釈や国際価値論が紹介され検討されている。翌年この本の書評が著された。評者はマルティン・グランチャイ氏（スロバキア工科大学）。これまでほとんど英訳されることがなく英語圏の研究者の目に触れることの少なかった日本人による研究は、評者の関心を大いに引いたようである。グランチャイ氏は、木下先生と故行沢健三先生（京都大、当時）の名前をあげ、書評を次のように結んでいる。「世界の別の地域のそれほど知られていない経済学者の、英語に翻訳されていない著作の中に、国際貿易理論の重要な問題に対するいかに多くの答えが隠されていることか」（『経済学史研究』第60巻第１号、2018年７月）。

故名和統一先生と木下先生が礎石を築かれた第一世代の国際価値論は、不等価交換論を中心とする第二世代の議論を経て、現在、投入財を考慮した第三世代の議論に受け継がれている。私が参加している研究会においても、木下先生が提唱された「国民的生産力」概念の妥当性がしばしば議論になっている。先生が自分の国際価値論はなかなか他者にきちんと読んでもらえず理解してもらえないと言われていたことを記憶している。そんなことはない。先生が切り拓かれた国際価値論という理論領域の命脈は、人を変え形を変えて受け継がれている。

昨年12月７日には、「木下悦二先生の白寿をお祝いする会」が福岡で開かれた。この会の最後に我々ゼミ生が書いた卒業論文が各自に返却された。渡された袋の中を見て驚いた。そこには卒業論文のほかに修士論文や助手時代に執筆した習作レベルの論文が入っていた。それだけではない。木下先生のゼミナールに入るときに課題として提出したレポートまで入っていた。こういうものまで保管されていたのかと思うと胸が熱くなった。これらを各ゼミ生に返されたのは、「カエサルの物はカエサルに」ということだけではなかろう。「未だ何者でもなかったころの自分を忘れず人生に励め、仕事に精励せよ」という、白寿を迎えられた今日も研究の炎を燃やし続けられておられる木下先生ならではのメッセージであろう。研鑽を重ねたい。

恩師を超えることが義務であるはずの弟子が恩師

３年次の萩でのゼミ合宿

のことを讃えてばかりでよいものかどうか分からない。しかし、私は木下先生という恩師をもてたこと、木下先生のもとで学べたことを誇りに思う。それに感謝したい。それは私の生涯の財産である。木下先生がいつまでもお元気でお過ごしになられることを心から祈念申し上げたい。

リレー随想

人生は「ご縁」が大事

東京海上日動火災保険株式会社
奥村　貴志氏
1993(平成5)年卒

1．念願の九州大学経済学部に入学

私の高校３年の大学受験は共通一次が最後となる年、平成元年でした。共通一次の結果や自分の学力を冷静に分析すると、九州大学経済学部は言わばチャレンジ校でしたが、どうしても行きたくて両親と担任の先生を説得し、受験させてもらいました。

当時、合否を確認するには合格者発表日に九州大学に行き、合格者の受験番号が表記されている掲示板を見に行くしか方法がありませんでした。「多分、合格してないだろう」と思い、不合格ならばすぐに予備校の申し込みができるよう願書を持って、実家の熊本から九州大学の合格者掲示板を見に行きました。自分の番号を合格者掲示板から見つけた時のことは今でも鮮明に覚えています。この上ない喜びと同時に、「努力は報われるんだな」と初めて実感した瞬間でもありました。

2．サークル活動

入学後の私は、勉強もそれなりにしたとは思いますが、ユースホステルサークルに入り、サークル活動に一番力を入れました。ユースホステルは「青少年少女の旅に安全かつ安価な宿泊場所を提供しよう」という趣旨で始まった運動により生まれた、ドイツ発祥の宿泊施設です。

サークルでは、六本松キャンパス周辺の地元の小学生を募って、ユースホステルを利用した旅行に連れて行き、ユースホステルを使った旅行の素晴らしさを伝えるのが、年に１回のメイン行事となっていました。ご両親からすると「見知らぬ大学生に子供を預けて、旅行に行かせるのは不安だ」と思われるのは当然のことであり、今のご時勢ではなかなか難しいかも知れません。しかし、当時はご両親への説明会を実施し、旅行の趣旨や安全には万全を期すことをお伝えすると、快くお子さんを送り出していただけました。旅行に参加してくれた小学生たち、そしてそのご両親の方々とのご縁で、サークル活動は充実したものになりました。

またサークルのメンバーが個々にユースホステルを使った旅行をし、使ったユースホステルのことや旅行での出来事を共有する活動も行っていました。

その活動の中で一番、私が印象に残ったユースホステルが「桃岩荘ユースホステル」です。

私は大学４年生の時に一人旅をし、北海道を二週間で一周しました。その時に礼文島にある「桃岩荘ユースホステル」に泊まりました。夜の夕食後は宿泊者同士が交流できる様々なイベントがあり、翌日には礼文島最北端のスコトン岬から礼文林道までの約30kmの距離がある「愛とロマンの８時間コース」を歩きました。十数名が１チームとなって歩くのですが、８時間も一緒に行動を共にすると、いろいろと話をするようになり、すっかり仲良くなりました。特に旅行が好きで集まっている一人旅の人がほとんどでしたので旅行の話で盛り上がり、その後はみんなで隣の利尻島に行って、利尻富士（利尻山）に登りました。この時に会ったメンバーは私も含めて大学生がほとんどでしたが、それぞれ全国各地で就職し、今は全員が立派な社会人や専業主婦になってい

利尻富士山頂にて

ます。そして、今でも年に１回はみんなで集まります。社会人になると会社内の人としか接点がなくなってくるのですが、この北海道旅行で知り合った、何でも遠慮なく話ができるメンバーとのご縁は私にとって、かけがえのない財産です。

ちなみに「愛とロマンの８時間コース」とはよく言ったもので、メンバーの中にはその後に結婚した方もおられます（私ではありませんが）。

３．先輩に憧れて保険会社に入社

大学卒業後、私は総合商社に入って「ラーメンからミサイルまで」と言われているどの事業になるかは分からないものの、ダイナミックかつグローバルな仕事をしたいと漠然と思っていました。ただ「就職活動で様々な会社を訪問できるのは一生に一度なので、少しでも関心のある会社は訪問しよう」と考え、60社近くの様々な業種の会社を訪問しました。

そして、日動火災（現在の東京海上日動火災）を会社訪問した時に、九州大学の先輩にお会いしました。その先輩は私より14歳上で、当時は36歳だったと思います。常に元気で前向きで、会社の業績を上げながらも、その後は「自分の人生なんだから、入社する会社は自分自身でよく考えて決めなさい」と言って私のことを気にかけてくれた先輩の姿を見て、「自分もこんな社会人になりたい」と純粋に思いました。

その後、「先輩と同じ会社に入りたい」と思って損害保険業界のことや日動火災のことを自分で研究し、両親や友人に相談することもなく自分自身で考えたうえで、日動火災に入社することを決めました。

先輩とのご縁があったからこそ、私は今の会社に入社しており、これまで苦労した時期がありながらも何とか仕事を続けることができているのは、就職活動時に先輩の姿を見て以来「自分もこんな社会人になりたい」と思い続けてきたからだと心の底から思っています。

４．現在は希望通りの仕事

日動火災に入社した私の最初の配属先は人事でした。保険会社に入社したものの、保険とは無縁の仕事でしたが、約７年間の人事での仕事は「会社の人事とは何をする部署なのか」ということを勉強させてもらいました。人事というと、社員の採用をイメージされる方が多いと思いますが、社員の採用の他にも人員計画の策定や給与制度の制定、社員の個人情報のメンテ・管理など幅広い業務がありました。そして、現在の職場の前任の方とは新入社員の時にお会いしました。その方は財務部門でしたので、部署は違ったものの、職場が同じ本社ビル内ということで、接点がありました。

その後は営業となり、神奈川県の川崎市で５年、岐阜県岐阜市で４年、熊本県八代市で６年と営業の仕事をしてまいりました。損害保険業界は保険会社の社員が直接、お客様に商品のご提案などを行うのではなく、代理店さんがお客様に商品のご提案などを行います。従って営業の仕事は主に代理店さんの育成やサポートとなります。八代市で勤務した後は代理店さんに出向となり、４年間お客様に直接、商品のご提案などを行う仕事もさせていただきました。

そして昨年の４月からは会社内でＦＰ（ファイナンシャル・プランナー）の資格取得を推進する部署に勤めております。実はこの部署は当初から希望していた部署でした。約10年前にＣＦＰというＦＰ資格のなかでも最高レベルと言われている資格を３年がかりで取得したのですが、この資格を活かした仕事をしたいという思いが強くなり、ずっと希望していました。

希望がかない、現在の職場での仕事を教えていただいたのは前述した新入社員の時にお会いした財務部門にいた方でした。約20年ぶりにお会いしたものの、お互いに知っている仲だったことから、仕事以外の話もよくするようになり、仕事面ではいろいろと丁寧に教えていただき、感謝しても感謝しきれません。本当に不思議なご縁を感じた次第です。

最後に「ご縁」が大事という話をもう一つ。私の妻は放送局のアルバイトで知り合ったアルバイト仲間だったのですが、そもそも放送局のアルバイトは前述のユースホステルサークルのつてで始めたアルバイトでした。また妻とは単なる友人だったのですが、会社は違うもののたまたま同じ損害保険業界に入社したことで、お互いにいろいろと悩みなどを話すようになり、結婚に至りました。

人生100年時代と言われる中、今年で私は50歳となり、人生の折り返し地点に立ちます。これまでの「ご縁」に感謝しつつ、これからの人生も「ご縁」を大事に生きていきたいと思います。

リレー随想

来日からの想い、「吃穿住行」篇

交通銀行東京支店
韓　鵬氏
2017(平成29)年卒

皆様はじめまして、韓鵬と申します。韓という苗字が付いていますが、れっきとした中国人です。現在から逆算すると、来日からそろそろ９年目で、それほど長くもないが、今までの人生で見るとほぼ３分の１とも言えます。そして、前回の九州大学経済学部東京支部懇親会に参加した時、偶然にも福留久大先生と再会し、寄稿のお話を頂きました。まだ社会に出て３年目の私でも本当に大丈夫かと思いつつ、滅多にない機会ですし、とても心配しながらこのお話を引き受けました。私でも皆様にお話できる事をいろいろ考えた結果、福留先生のお勧めでもありますが、今回のタイトルを主に私が来日からのあれこれの想いに決定しました。

まず簡単な自己紹介ですが、2011年３月（大学３年目の時）に大連外国語大学という中国の大学から福岡国際大学へ編入し日本へ留学致しました。母国の大学では情報管理と情報システムを専攻し、プログラミングを始め、日本語、英語、数学などを勉強しました。そして、福岡国際大学へ編入した後に国際コミュニケーション学部に配属され、当時、政治経済学を教える福留久大先生と初めて出会いました。九州大学経済学府に入学したのは2015年です。福留先生のご紹介で岩田健治先生と出会い、一生懸命に頑張って岩田先生のゼミ院生として無事入学しました。2017年３月に卒業後、東京日本橋にある交通銀行に入社しました。外資系とはいえ母国の銀行であるため、日本で中国人の多い会社と言えます。入社から現在に至って、まだそう長く無いですが、基礎窓口金融業務を始め、銀行間の決済や融資審査などの様々な業務を経験しました。東京生活では相変わらず勉強することが多い日々ですが、夏には車で伊豆の海に行ったり、冬には温泉とスキーなどに行ったり、自分なりに大都市生活に順応しつつあります。

今回のテーマは主に私が来日からのあれこれの想いなので、今からそれを中心に色々と皆様にお話したいと思います。想いとは言え、それも中国語で「吃穿住行」という言葉から生まれてきたものと私は思っています。なので、私もこの四つの漢字を巡って自分の思いを述べたいと考えております。

まずは「吃」、つまり食べ物の事であります。今でもよく中国にいる友達から「先週日本料理を食べに行った」と話し掛けられます。「じゃ、何を食べました？」と私が友達に質問すると、ほとんどの回答は「寿司、刺身、天ぷらと卵焼き」であり、そして最後には必ず「量は少ないにもかかわらず、日本料理は本当に高いですね」と言うようなため息が聞こえてきます。私は中国で日本料理を食べたことがないので値段がどれほど高いかわかりませんが、少なくとも、最初来日時、もと中国東北育ちの私にとって、「量」は本当に少なかった。一番馴染みで値段も優しいお弁当を例にすると、お弁当２個半の所でやっと少しお腹が一杯の気がします。しかし、「量」が少ないとは言え、日本料理を食べるたびに、手の温もりや味と栄養バランスに対する繊細さなど、いつもその料理人の心に感動することもまた事実です。とは言え、当時バイト生活の自分がお腹一杯食べられるようにするため、学生の時にはほとんど家で自炊をしていました。

次には、「穿」、つまり着物のことであります。社会人となってからはほぼ年中スーツの生活であり、学生の時にも大抵スポーツウェアばかり着ていたため、せっかく「日系着物」が中国で大人気ですが、私にとって本当に馴染みのないことなので、ここでは省略させていただきます。

三番目は「住」、つまり住居のことであります。来日最初は太宰府で、そのあとは福岡市、東京都と埼玉県を転々とし、それ以外の所にも旅行などを通じて日本各地に足を運んだことがあります。しかし、今思い出すと、その中ではやっぱり太宰府が一番印象的だと思います。来日当日、飛行機から降りて、外は冷たい雨でしたが、空気は本当に爽やかできれいでした。その後、大学の送迎バスに乗っていきなり太宰府に向かいました。借家は大学が既に用意済みで、高校までずっと実家で住んできた自分にとって、ある意味で初めての独立生活と言えました。中国から持って来た多くの荷物をかかえて、借家の門を開いた時のドキドキとビックリ、いまでもはっきり覚えています。本当に自分の目を疑いながら複雑な気分でした。なぜなら、日本の賃貸マンションやアパートなどと違い、中国の家は一人暮らしだとしても遥かに大きいし、インテリアも多いです。しかし、「麻雀虽小五俱全」、日本の家が小さいとは言

え日常生活に必須な物は全部揃っています。これが日本の借家に対する第一印象でありましたが、現在日本に住み慣れた私がたまに中国に帰る時、実家はいつも不自然に大きく感じられ、逆にその必要性を疑うことになっています。太宰府には約２年半住んでおり、天満宮にお参りしたり、自転車で遠いスーパーに買い物に行ったり、たくさんの思い出は今でも眼前に彷彿として、日本各地の天満宮を見た時にもとても懐かしいと感じます。

最後は「行」、つまり乗り物や旅行の事であります。日本では、特に東京に移住した後、電車はまさに日常の一部の様に使われています。しかし、初めて日本で電車に乗った時、いつも故郷の列車を思い出し、そしてなんだか遠い所に行く様な気分になっていました。今ではもっと自然に乗れますが、朝通勤の時には東京の人口数に日々驚いています。また、学生の時と違って、社会人となってから休みの時には、いつも車でどこか遠い所に行く様になっています。旅行よりリラックスしながら、日本の様々なところの生活を体験するのが主な目的とも言えます。緑と花に囲まれて散策したり、歴史を守ろうという町の心を尊敬しながら観光したり、お寺などで何も考えずにボーとしたり、日本が世界中でも観光地として有名な理由はそれだと思います。誠心誠意本当のリラックスした気持ちを味わえるようにしながら、人々の心を優しく、そして落ち着くにように変えてゆく事だと私はいつも感じています。

これまで日本で過ごしたこの９年間は、私の人生にとって本当にかけがえのない貴重な９年間でした。振り返ってみると、恩師たちのご指導、多くの日本人の友人との出逢い、その感動と感謝の気持ちが心の奥から溢れてきます。最後になりますが、私の恩師福留久大先生と岩田健治先生、懇親会開催のきっかけを作って頂いた九州大学の先輩たちに改めて感謝申し上げて締め括りとさせて頂きます。

人物往来 ～退任

幸せな人生を目指して

経済学研究院教授
岩﨑　勇氏
［専門分野］タックス・マネジメント・財務会計

九州大学大学院経済学府産業マネジメント専攻（QBS）への着任以来、タックス・マネジメント・財務会計・コーポレート・ガバナンスと監査・演習を担当してきました。QBS創設時のメンバーの１人であり、少しずつ創設メンバーがQBSを去っていきつつあります。過ぎてみれば、17年が瞬く間に過ぎました。着任時に考えた博士号を取ることや後進を育てるという希望は自身の努力不足で叶いませんでした。他方、以下のような叶ったものもあります。

①研究会を持つこと

着任時から「九州大学会計研究会」（その後、「九州大学会計リサーチ･ワークショップ」に名称等を変更）を立ち上げ、九州大学及び近隣諸県の先生方のご協力を得て、17年間で109回の研究会を開催することができ、自己の研究にも大いに貢献しました。

②学会の理事及び研究グループの主査

九州大学に着任する以前は、学会理事等は高嶺の花でしたが、着任後理事等に就任する機会に恵まれました。さらに、理事になってみると学会がどのように運営されているのかが理解でき、研究グループの立ち上げなどのノウハウを得られ、研究上非常に有益でした。そして、研究グループの成果が最終報告書や本の出版に結実しました。

③科研費の取得

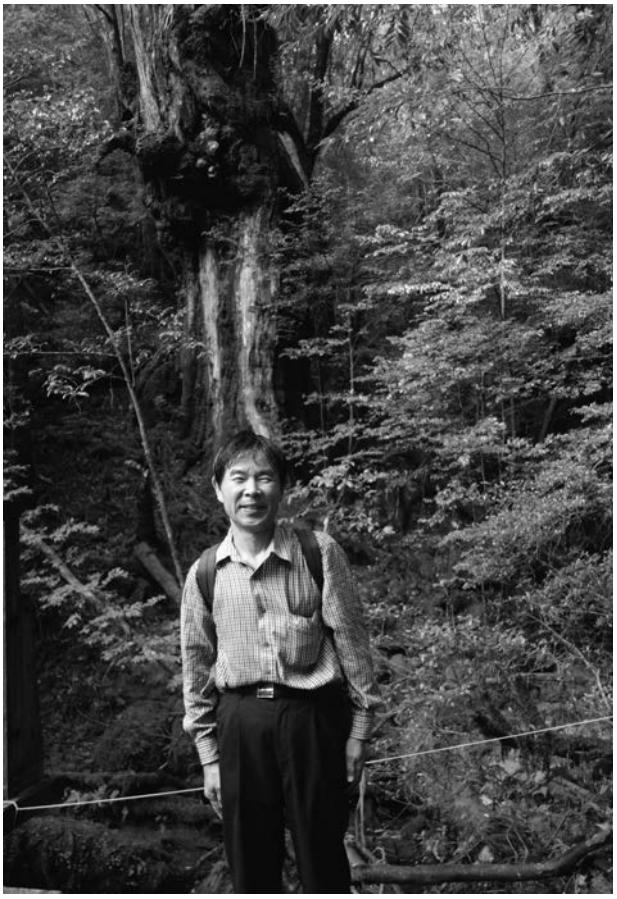
これが可能であったのは、九州大学が、これに全学で力を注いでいるお陰です。

④高校用文部科学省検定教科書の監修

文部科学省検定教科書である『原価計算』（監修）が発刊され、現在高校で使用されています。自分が手掛けた教科書が高校で使用されているとは、若いころには夢にも思いませんでした。また、現在、新たに会計関連科目について２冊のプロジェクトが進行中です。

⑤本の出版

九州大学に来て多くの本を出版する機会に恵まれ、非常に感謝しています。特に昨今出版事情が厳しくなり、本の出版の貴重さを改めて再認識させられています。お陰様で現在、６冊の本の出版に向けたプロジェクト（３冊は脱稿済み）が動いています。



屋久島にて

⑥監査

縁あって福岡県監査委員会委員（非常勤）として、福岡県の監査に従事することができ、県政の観点から物事を見ることができ、大変勉強になりました。

⑦税理士試験委員

縁あって思わぬ時に税理士試験委員の依頼がありました。税理士試験という国家試験の作成・実施・採点に関われて、試験制度の意義や全体像が把握でき、大きな勉強になりました。

⑧FM福岡

FM福岡で財務会計や稲盛哲学・松下哲学そして幸せと成功のための哲学をお話しさせて頂き、大変有益でした。これを、実際に「**イブニングビジネススクール**」や授業で活用し、実際の聴衆者の反応を知ることができ、人生哲学や経営哲学の必要性を再認識させられました。

⑨健康で横浜に帰ること

横浜に家があるので、九州大学での生活が終了した時に、横浜を出発した時のように元気な姿で横浜に帰ることを考えていました。なお、更に５年間関西の大学院で教鞭生活を続けますが、健康第一に過ごしたいと思っています。

⑩人生哲学

この年になってやっと人生の生き方がおぼろげながら見えてきたことが最大の収穫でした。現在は、この確立された人生哲学（「人生の法則」）をさらに深化させるべく研究を続けています。人生の最高目的を「幸せに生きること」とし、このためには、「因果律、健康、一切唯心造、自他一如、慈愛、感謝、本心良心、積極性、潜在意識、空」の各法則に従うことが大切だと考えています。また、「幸福・成功の方程式」としては、「（考え方×積極性×実践力[1]）×縁[2]＝幸福･成功[3]」というものを考えました。なお、これについての詳しい内容については、幻冬舎から『幸せになれる人なれない人－心の法則からのアプローチ－』が2020年９月に出版予定です。

---

[1] これらが「因」（自力本願）と考えます。

[2] これが「縁」（他力本願）と考えます。

[3] これが「果」（結果）と考え、式全体が人生全体を支配する行為法則である「因果律」を示しています。

人との出会いに恵まれた38年間でした

経済学研究院教授
大下　丈平氏

［専門分野］原価計算
1978（昭和53）年卒
1980（昭和55）年博士入

本誌では、国際交流委員会委員長として、国際学術交流振興基金の運営状況の年次報告で皆様にお目に掛かってきましたが、本年2020年の３月をもって無事退職いたしました。この４年間、本当にお世話になりました。心から厚くお礼申し上げます。

さて、いま本原稿を執筆している時点（１月末）では、最終講義に向けた準備に追われている真最中で、以下では、その講義の骨子を書き留める形で別れの言葉としたいと思います。

私の研究活動は、思えば西村明先生（九大名誉教授）と19世紀英国の『工場会計』に関する文献を読み進めることから始まりました。問題意識も希薄な私を懇切丁寧に指導していただき、そこから私の「原価計算発達史論」の研究が始まります。と同時に、当時からフランスかぶれの私は、手探りでフランスの原価計算・工業会計の文献収集を始め、恐る恐る19世紀フランス工業会計論に着手しました。文献・資料集めに苦労するなか、ほとんど研究は進まず、毎日、テニスや野球に明け暮れ、遊び呆けていました。テニスの腕だけはかなり上達しました。

しかし、前任校での９年間の月日のあと、大きな転機がやってきました。本校への転任です。転任するとすぐに濱砂敬郎先生（九大名誉教授）から留学を勧められ、翌年には家族でフランス・パリに飛び立つことになりました。当時の濱砂先生の叱咤激励がなければ、今の私はありません。先生には本当に感謝の気持ちしかありません。

パリから帰国後、留学中にまとめた研究成果を『フランス管理会計論：工業会計・分析会計・管理会計』として公刊。同時に、その勢いに乗って、迂闊にもフランスのビジネススクールからの講義の要請を引き受けてしまい、それから２年半ほどは準備のための辛い日々が続きました。そして、その講義をなんとか終えたことで、私はマネジメント・コントロール論への日本の貢献について自信をもって論じることができるようになりました。辛かったが、ともかく苦労の甲斐はありました。

その後、1998年に教授に昇進するや、折からやってきた組織改革に伴って学内業務が３倍ほどに膨れあがり、もう研究どころではなくなりました。自らを失い、ほぼ立往生の状況。そうしたなかで、その頃なぜか毎年、科学研究費がもらえるようになり、パリ第九大学のアンリ・ブッカン先生に会いに出かけることを楽しみにするようになりました。先生の主著*Le Contrôle de Gestion*を素材にした先生との議論は楽しいものでした。その議論の成果は、すぐに拙著『現代フランス管理会計：会計、コントロール、ガバナンス』に結実しました。残念なことに、先生はそのあとすぐに亡くなられましたが、先生には心からお礼を申し上げたいと思います。

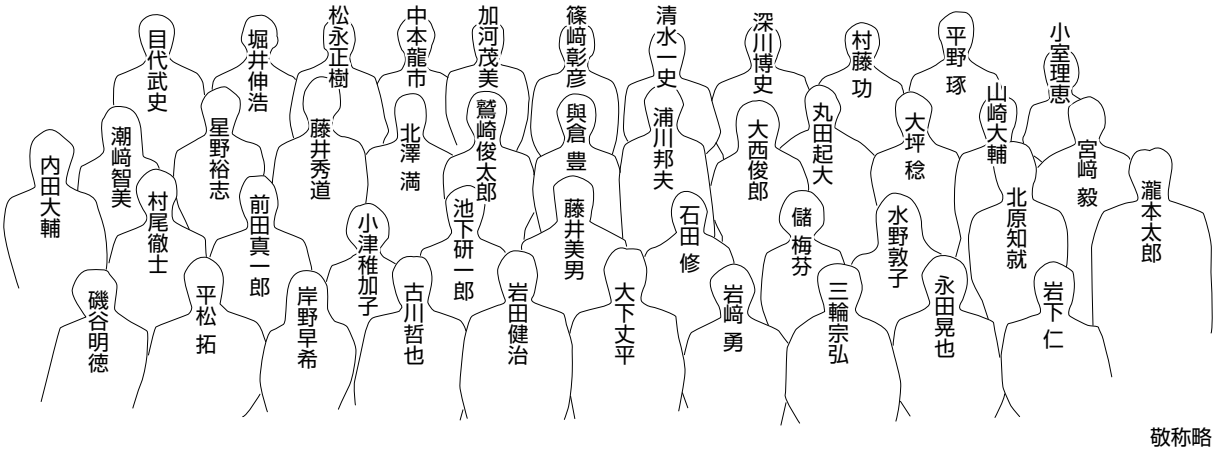
その後は、前著で得た４つの仮説を丹念に論証することが仕事の中心となり、とりわけ（１）管理会計とマネジメント・コントロールとの峻別、（２）コントロールのパラドックス性の威力、さらにその（３）パラドックスを緩和する装置としてのガバナンスレベルでのコントロールの構想、の３点が研究の足場となりました（「現代フランスコントロール論の系譜」）。また退職間際の数年は、博士論文指導のなかで、ガバナンスの具体的な計算実践としての内部統制論に関わることになりました。いま、この内部統制の重要性を強く認識し、これをどのように取り扱うべきか思案しているところです。残念ながら、この辺で紙幅が尽きました。

最後に、九大での29年という長い月日の間、快適な研究教育体制を与えていただいた経済学研究院の皆様に厚くお礼を申し上げて、お別れの言葉といたします。特に、前学部長の磯谷先生、現学部長の岩田先生、それから留学生担当講師の儲先生には、国際交流に関わり多大なご支援をいただきました。この場を借りて、感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

最終講義の際の一齣　2020年１月31日

経済学研究院の先生方の近影

2020.3.4　於 九州大学伊都キャンパス



敬称略

例会第109回を超え、一同ますます意気軒昂なり!!!
目指そう150回!!!

九 大 ど げ ん 会

九大経済学部S.40年（1965年）卒有志一同

第110回 R2.5.29(金)コロナウイルス感染予防のため中止
第111回 R2.8.21(金)18:00〜

株式会社就面
（定着にこだわる社員研修・人材採用コンサル）

代表取締役
松 田　剛 次（平7卒）

〒812−0011　福岡市博多区博多駅前1−15−20−2階
(サーブコープ内)
TEL：(092) 419−2670
http://saiyo-tekoire.com/

御礼とお願い

同窓関係の皆さまからご寄付と広告の申し出を頂きました。誠にありがとうございました。
頂いた広告料は経済学部同窓会の運営資金の一部となりますので、今後共ぜひご協力の程お願い申し上げます。
なお、寄付と協賛広告のお申込み、お問い合わせは経済学部同窓会事務局（tel：092-802-5561、e-mail：dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp） までご連絡をお願い致します

寄付者ご芳名：橋本純夫様（昭和47年卒）、福留久大様（九州大学名誉教授）

経済学部同窓会会則

（名称）

第１条　本会は九州大学経済学部同窓会と称する。

（目的）

第２条　本会は会員相互および母校との親睦・交流ならびに九州大学経済学部の充実、発展をはかることを目的とする。

（事業）

第３条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

⑴　講演会、懇親会の開催

⑵　卒業生名簿の発行

⑶　会報の発行

⑷　その他本会の目的を達成するために必要な事業

（本部並びに支部等）

第４条　本会は本部事務所を九州大学経済学部内（福岡市西区元岡744）に置く。

本会は東京、関西、福岡にそれぞれ支部を設置し、これ以外の地区には、活動状況に応じてそれぞれ地区同窓会を設置する。支部ならびに地区同窓会に対しては、運営の一助として運営費を支給することができる。

（構成）

第５条　本会は次の者を以って構成する。

⑴　九州帝国大学法文学部経済科卒業生

⑵　九州大学経済学部卒業生

⑶　九州大学大学院経済学研究科・経済学府修了者および単位取得者

⑷　九州大学経済学部および大学院経済学府在校生

⑸　九州大学経済学部・大学院経済学研究院教員および旧教官・教員

⑹　上記に準ずる者で、理事会の承認を得た者

（役員）

第６条　本会は次の役員を置く。

理事25名以内、評議員各卒業年度最低１名、監事２名、顧問若干名

２　理事のうちから会長を１人、副会長を若干名選任する。

３　役員の任期は３年とする。ただし、重任を妨げない。

４　⑴会長は本会を代表し、会務を総理する。

⑵副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。

⑶理事については別に規定する。

⑷評議員は、各地区、各卒業年度の会員に対する本会運営上の窓口となるほか必要に応じて理事会に出席し、意見を述べることができる。

⑸監事は本会の会計を監査する。

⑹顧問は理事会の推薦により会長がこれを委嘱する。なお、会長の要請がある場合は、顧問は理事会に出席して意見を述べることができる。

（理事ならびに理事会）

第７条　理事は、理事候補者の中から、総会において選任する。そのため、本部ならびに各支部は、それぞれ支部役員、経済学研究院教員の中から若干名の理事候補者を推薦し、本部に届け出る。理事候補者の選任は、本部及び理事会で決定する。

２　会長、副会長、理事を以って理事会を構成する。

３　理事会は、本会運営上の重要事項を審議決定し、総会に提案する。理事会の議長は会長とする。

（総会）

第８条　本会は毎年１回通常総会を開催する。通常総会の開催場所は、福岡、東京、福岡、大阪、福岡の順に、各支部総会の開催に合わせて開催することとする。ただし理事会が必要と認めたときは、臨時総会を開くことができる。

２　通常総会では次の事項を承認する。

⑴予算および決算に関する事項

⑵役員の選任、会則の制定および変更に関する事項

⑶その他本会の運営に関する事項

３　総会の議事は、出席会員の過半数を以ってこれを決定する。

（運営）

第９条　本会の経費は会員の会費、寄付金、その他の収入をもってこれにあてる。会員の会費は理事会の定める会費規定ならびに会費規定細則による。

（会計年度）

第10条　本会の会計年度は毎年４月１日に始まり、翌年の３月31日に終わる。

（個人情報の保護）

第11条　本会は、会員の個人情報を取り扱うにあたり、個人情報の保護に関する法律（平成15年法律第57号）及び個人情報保護指針・ガイドラインを遵守する。

２　本会は、同窓会活動の目的の下、九州大学経済学部同窓会個人情報保護指針に従い、同窓生の個人情報を適切に取り扱うものとする。

（設立年月日）

第12条　本会の設立年月日は昭和50年10月４日とする。

※会費規定

１．会費は１人年額1,500円とする。

２．会費は卒業生名簿発行年度に徴収する。

３．必要に応じて臨時経費を徴収することができる。

４．会費規定は理事会の議により変更することができる。

※会費規定細則

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（３年間分4,500円）に区分する。

終身会費は一括払いまたは３分割または６分割による分割払いのいずれかによって払い込む。普通会費は３年ごとに4,500円ずつ払い込む。但し、11回の納入を以って終身会費納入とみなす。なお、第５条の⑷について、入学時に35,000円一括納入した者については、終身会費納入とみなす。

①終身会費	一　括	45,000円
②　〃	３分割	15,000円×３回（1.5年間で納入完了）
③　〃	６分割	7,500円×６回（３年間で納入完了）
④普通会費	３年毎に	4,500円ずつ（11回～ 49,500円の納入で完了）

附　　則

本会則は、平成 ８年10月11日に改定され、同日より施行する。

本会則は、平成18年 ２月10日に改定され、同日より施行する。

本会則は、平成30年10月 １日に改定され、同日より施行する。

九州大学経済学部同窓会歴代会長

初　代　田中　　定氏（昭和50年10月４日～）（３期８年）
第２代　森下　　弘氏（昭和58年２月４日～）（１期３年）
第３代　岡野　正實氏（昭和61年10月24日～）（２期６年）
第４代　谷川　大介氏（平成４年10月９日～）（１期１年）
第５代　渡邉　彦士氏（平成５年７月７日～）（１期３年）
第６代　福岡　道生氏（平成８年10月11日～）（１期３年）
第７代　吉田　清治氏（平成12年２月10日～）（１期２年）
第８代　森山　靖章氏（平成14年５月31日～）（１期３年）
第９代　平山　良明氏（平成17年７月７日～）（１期３年）
第10代　池田　弘一氏（平成20年７月７日～）（２期６年）
第11代　貫　　正義氏（平成26年７月７日～）

同窓会からのお願い

同窓会会費の納入をお願い致します。

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（３年間分4,500円）になっております。
終身会費は一括払いと分割払いとがあります。ご都合のつくときにご協力よろしくお願い致します。

①終身会費	一括	45,000円
②　〃	３分割	15,000円×３回（1.5年間で納入完了）
③　〃	６分割	7,500円×６回（３年間で納入完了）
④普通会費	３年間分	4,500円ずつ（11回・49,500円の納入で完了）

◎平成18年（2006年）３月末日までに旧同窓会規定の終身会費を既に納入頂いております皆様は、そのまま新同窓会規約の終身会員に移行しております。
◎従来の普通会員として今まで振り込まれた合計金額と、49,500円との差額を、今後何回かの分割払い、または一括払いで払い込まれた場合も、終身会員に移行となります。
◎終身会費を分割払いにされます方は、半年毎に３回又は６回続けてお振り込み頂きますようお願い致します。
◎会費納入や住所変更等のデータは、令和２年３月31日現在で集計しました。

住所など身辺の事情に変更が生じましたら、すみやかに下記同窓会事務局までご連絡ください。

九州大学経済学部同窓会事務局　（開室：平日の月・火・木・金　10時～17時）
〒819－0395　福岡市西区元岡744　九州大学経済学部内
TEL 092-802-5561／FAX 092-802-5560／E－mail：dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp
経済学部同窓会ホームページ　http://koyukai.kyushu－u.ac.jp/alumni/4

複数の同窓会関係者が写されている写真類を掲載したいと考えております。
良いお写真をお持ちでしたら事務局までご連絡下さい。